

文部科学省委託事業

「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」
平成30年度（2018年度）事業完了報告書

遠隔教育システムを用いた国内外の大学 等との連携による教育効果について



長崎県教育委員会

平成31年3月

目次

第1章 事業計画について

- 1 調査研究課題…………… p. 2
- 2 調査研究のねらい…………… p. 2
- 3 調査研究の内容
 - (1) これまでの本県の取組について…………… pp. 2-4
 - (2) 概要…………… pp. 4-5
 - (3) 調査研究校…………… p. 5
 - (4) 検討会議委員…………… p. 5
 - (5) 具体的内容等…………… pp. 5-6
 - (6) 実施方法及び効果測定の方法…………… pp. 6-7
 - (7) 事業概要図（ポンチ絵）…………… p. 8

第2章 平成30年度（2018年度）の取組

1 事業管理機関

- (1) 委託契約まで…………… p. 10
- (2) 外部検討会議委員の委嘱について…………… p. 10
- (3) キック・オフ・ミーティング…………… p. 11
- (4) 第1回検討会議…………… p. 12
- (5) 第1回遠隔教育サミット in 長崎…………… pp. 13-19
- (6) 第2回検討会議…………… p. 20

2 調査研究校

(1) 対馬高等学校

①全体概要

- ア 取組の概要…………… p. 21
- イ 教育活動の特色と研究主題…………… p. 22
- ウ 推進テーマと実施内容…………… p. 23
- エ 連携協力校…………… pp. 23-24
- オ 校内実施体制…………… pp. 24-25

②実践内容

- ア 釜山外国語大学校との実践…………… pp. 25-26
- イ 九州国際大学との実践…………… pp. 26-27
- ウ 長崎外国語大学との実践…………… pp. 27-28
- エ 立命館アジア太平洋大学（APU）との実践…………… pp. 28-29
- オ 長崎県立大学との実践…………… p. 29
- カ 東明館高等学校との実践…………… p. 30
- キ 立教大学との実践…………… p. 30
- ク 釜慶大学校との実践（予定）…………… p. 30

③本年度の成果と課題まとめ

- ア 各種効果測定結果…………… pp. 31-33
- イ 成果と課題…………… pp. 34-35

④今後の取組…………… p. 35

(2) 壱岐高等学校

- ①本年度の取組…………… p. 36
- ②本年度の成果と課題まとめ…………… pp. 37-42
- ③今後の取組…………… p. 42

- 3 本年度の効果検証まとめ…………… pp. 43-46

第1章 事業計画について

1 調査研究課題

遠隔教育システムを用いた国内外の大学等との連携による教育効果について

2 調査研究のねらい

本県は、日本列島の西端に位置するとともに、多くの国境離島地域を有する。そのため古くからアジア諸国との交易があり、様々な文化がもたらされた歴史を持つ。このような地理的・歴史的経緯を踏まえ、この度研究指定を行う離島の県立対馬高等学校では、韓国語と韓国の歴史・文化を専門的に学ぶ国際文化交流科（各学年 40 名定員）をこれまでの国際文化交流コース（各学年 20 名程度）から改組新設し、県立壱岐高等学校では、中国語と東アジアの歴史について専門的に学ぶ東アジア歴史・中国語コース（各学年 20 名程度）を設置し、それぞれ特色ある教育が行われている。

これら 2 校において、韓国や中国の大学をはじめ、国内の大学・高校や専門機関等と遠隔教育システムで結ぶことで、①コースに関連する専門性の高い教育内容を生徒に提供する、②生徒の語学の運用能力やコミュニケーション力等を高める、など教育内容の充実を図り、生徒の資質能力の向上と学校の活性化を目指す。あわせて、語学教育の充実に資するよう、海外の大学から遠隔システムを使った授業配信のモデル事例を全国に向けて発信したい⁽¹⁾。

3 調査研究の内容

(1) これまでの本県の取組について⁽²⁾

本県は、他県に先駆けて平成 25 年度から平成 27 年度の 3 年間、県独自事業として「遠隔授業による教育活動充実事業」を実施し、これに続く平成 27 年度から平成 29 年度の 3 年間、文部科学省委託事業である「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」を受託し、安価で汎用性の高い Web 会議システムを用いた遠隔授業による教育効果を検証するための実践研究に取り組んできた。また他にも、慶應義塾大学より「論理コミュニケーション」の授業を配信したり、異なる学校の生徒同士の交流を行ったりするなど、同システムを利活用する取組を推進してきた。

①「遠隔授業による教育活動充実事業」（平成 25 年度～平成 27 年度）

県教育センターを含む全ての県立高校に遠隔教育システムを整備することで確かな学力を保障し、本県の教育水準の向上を図る事業。県教育センターから離島の高校に授業を配信。平成 26 年度は離島 13 校に対して 22 講座、平成 27 年度は離

⁽¹⁾ 文部科学省初等中等教育局長宛に提出した 2018 年 4 月 20 日付「事業計画書」p.1 より抜粋（一部修正あり）。

⁽²⁾ 文部科学省初等中等教育局長宛に提出した 2018 年 3 月 27 日付「企画提案書」pp.18-19 を参考にした。

島13校に対して24講座を遠隔配信。現在は、学校からの要望に応じる形で、県教育センターから離島地区の学校へ授業配信を行っている。

②遠隔教育システムを用いた「論理コミュニケーション」の授業（平成23年度～）

年度	配信側	受信側	備考
平成23年度	慶應義塾大学	上対馬高校	試行
平成25年度	〃	上対馬高校	学校設定科目として開始
平成29年度	〃	上対馬高校 島原高校 宇久高校 西彼杵高校 県立長崎東中学校	

③小中高一貫教育研究部会において、遠隔システムを用いた交流を実施（平成26年度）

年度	参加校	備考
平成26年度	宇久高校、北松西高校	生徒部活動交流
〃	宇久高校、北松西高校、奈留高校	生徒会交流

④「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」（平成27年度～平成29年度）

年度	配信側	受信側	教科・科目
平成27年度	上対馬高校	豊玉高校	家庭科
〃	対馬高校	豊玉高校	芸術科（音楽）
平成28年度	対馬高校	豊玉高校	家庭科、芸術科（音楽）
平成29年度	対馬高校	豊玉高校	家庭科、芸術科（音楽）

平成29年度までの3か年間、「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」において、汎用性の高いシステムを用いた遠隔教育の可能性について研究を進め、実践研究や検討委員からの助言、「遠隔サミット in 長崎」における指導助言等から、以下のような知見を得るとともに、本県教育委員会としての遠隔教育の今後の方向性についても確認した。

■得られた知見

- ①遠隔教育の活用は、離島山間地域に所在する学校において教育不均衡の是正に有効である。
- ②Skype等の汎用性の高いシステムを用いた遠隔教育の実施は、多方面との接続を可能としており、その活用には大きな可能性がある。
- ③実技や実習を伴う授業における遠隔教育の活用は不適であり、大学等が従前から実施する講義型での活用や、生徒間交流などでの活用において、より有効性が発揮できる。
- ④所在地の通信基盤の改善は困難だが、その中であっても各種サーバーを通さない無線ルーター（キャリアのものが望ましい）を用いたシステム構築など、若干の工夫の余地は残されている。

■「遠隔サミット in 長崎」で確認された成果や課題

- ① 遠隔教育について、高校より20年先行している大学との連携を進めることで、高校における遠隔教育の質の向上を図ることができる。
- ② 大学と高校で相互接続ネットワークを構築することを目指し、大学と高校が連携を深める必要があるのではないかと。

■遠隔教育に対する今後の本県の方針

- ① 遠隔教育については、専門性を有する大学等との連携により、生徒の論理的思考力を育成することに有益であり、遠隔教育システムを活用した高大連携のあり方について検討する。
- ② 特に、離島や半島地域など地理的にハンディキャップを持つ学校においては、遠隔教育システムの多角的・多面的な活用について、研究を継続する。

(2) 概要⁽³⁾

①遠隔教育の実施

- ・まずは来校しての出張講義を受けての補完的講義や質疑応答等を主として実施
→その後、主講義の一部または全部を遠隔教育で実施

国内大学から	長崎県立大学、長崎外国語大学、立命館アジア太平洋大学 九州国際大学、立教大学、奈良大学、別府大学 他
国外大学から	釜慶大学校、釜山外国語大学校 上海外国語大学
専門機関から	長崎県埋蔵文化財センター、壱岐市立一支国博物館 大浦天主堂キリシタン博物館

②遠隔交流の実施

国内高校と	東明館高校（佐賀県）、西伊豆高校（静岡県） 羅臼高校（北海道）
国外高校と	釜山情報観光高校（釜山市） 光明中学（上海市）
多角的交流	立命館アジア太平洋大学、東明館高校と対馬高校を 結んで実施

③海外語学研修、修学旅行の事前・事後研修における遠隔システムの活用

韓国と	釜慶大学校や釜山外国語大学校教師や対馬高校卒業生との交流
中国と	上海外国語大学教師や壱岐高校卒業生との交流

④自主研修における遠隔システムの活用

韓国と	釜慶大学校や釜山外国語大学校の先輩等へ進路決定までの相談
中国と	上海外国語大学の先輩等へ進路決定までの相談

⑤遠隔サミットの開催

⁽³⁾ 文部科学省初等中等教育局長宛に提出した2018年4月20日付「事業計画書」p.2より抜粋。

⑥遠隔システムの活用による教育内容の充実に関する効果検証

・以下の5点を検証

検証項目(1)	学習への内発的動機付け
〃 (2)	語学力
〃 (3)	課題研究の内容
〃 (4)	グローバル人材の育成
〃 (5)	学校満足度

(3) 調査研究校

学校名	設置場所	設置年度	課程	学科
対馬高等学校	対馬市	昭和23年	全日制	普通科、商業科
壱岐高等学校	壱岐市	昭和23年	全日制	普通科

(4) 検討会議委員

氏名	勤務先・職名等	勤務先住所
島村 秀世	長崎県教育庁 政策監	長崎県 長崎市尾上町3-1
林田 和喜	長崎県教育庁 高校教育課長	長崎県 長崎市尾上町3-1
西田 哲也	長崎県教育センター 副所長	長崎県 大村市玖島1-24-2
梅嶋 真樹	慶應義塾大学 特任准教授	神奈川県 藤沢市遠藤5322
周 国強	長崎県立大学 准教授	長崎県 西彼杵郡長与町まなび野1-1-1
山田 良介	九州国際大学 准教授	福岡県 北九州市八幡東区平野一丁目6-1
立木 貴文	長崎県立対馬高等学校 校長	長崎県 対馬市巖原町東里120
平山 啓一	長崎県立壱岐高等学校 校長	長崎県 壱岐市郷ノ浦町片原触88

(5) 具体的内容等⁽⁴⁾

①社会における現状、課題、社会的ニーズ等

本県のみならず、一部の学校を除いて、全国的に人口減少による学校規模の縮小が進んでいる現状がある。学校規模の縮小は、ひいては児童生徒への教育内容の狭隘をもたらしている。このような中、遠隔システムを使い、国内外の大学、高校等

⁽⁴⁾ 文部科学省初等中等教育局長宛に提出した2018年4月20日付「事業計画書」pp.2-3より抜粋。

からの授業配信に取り組むなど、生徒に多様で質の高い学びを実現するための授業を開発することは、社会的にニーズが高く、有意義な取組だと考えている。

②目的

高等学校よりも遠隔教育の研究、実践が20年先行している大学と連携を進めることで、高等学校における遠隔教育の質の向上を図りたい。特に、遠隔システムを活用して、国内外の大学や高校、専門機関等と連携を深めることで、生徒に多様で質の高い学びを実現させるための授業を開発し、離島や半島地域など地理的なハンディキャップを持つ学校における遠隔教育の多角的、多面的な活用法について発信したい。

③目標

対馬高校国際文化交流コースと壱岐高校東アジア歴史・中国語コースにおいて、両校と韓国、中国の大学や、国内の大学、高校、専門機関等を遠隔システムで結び、**①**コースに関連する専門性の高い教育内容を提供し、グローバル時代を生きる生徒に必要な資質能力を涵養する。また、**②**生徒の語学運用能力やコミュニケーション力の向上を図る。これらの取組によって、両校の教育内容をさらに充実させるとともに、学校の活性化を図ることを目標とする。

④先導性、新規性

本県では離島、半島地域に過疎化が進展している僻地が多数存在する。そのため、従前より遠隔教育システムの実践研究を進めてきた。これまでの遠隔教育システムについての研究実績を活用して、国外の大学、高校との遠隔教育に取り組む点、また、グローバル教育の視点から、異文化理解や東アジアの言語や歴史等、学習の内容面においてもこれまでの取組を発展、充実させようとしている点に先導性、新規性があると考えている。

(6) 実施方法及び効果測定の方法⁽⁵⁾

①調査研究の内容・方法

■特徴やポイント

韓国や中国の大学をはじめ、国内の大学・高校や専門機関等と遠隔教育システムで結び、教育内容の充実を図ることで、次の研究仮説**(1)～(5)**に対する検証を行う。

(1) 学習への内発的動機付けについて

遠隔教育システムを活用し、専門性が高く、多様な学習内容を提供することで、学びに対する生徒の主体性や積極性を高める。

(2) 語学力について

遠隔教育システムを活用した韓国語や中国語等の学習プログラムを開発することで、語学力を高める。

(3) 課題研究について

遠隔教育システムを活用して専門機関から助言を受けることで、課題研究や論文内容の質を高める。

⁽⁵⁾ 文部科学省初等中等教育局長宛に提出した2018年4月20日付「事業計画書」p.3より抜粋（一部修正あり）。

(4) グローバル人材の育成について

遠隔教育システムを活用し、日本人としてのアイデンティティや日本の歴史と文化に対する深い教養を育むとともに、コミュニケーション能力、異文化理解の精神等を身に付けさせ、特にアジア諸国との架け橋になりうるようなグローバル人材を育成する。

(5) 学校満足度の向上について

遠隔教育システムを活用し、様々な教育内容の充実を図ることで、入学者数を増やすとともに学校に対する総合的な満足度を高める。

■連携機関

対馬 高校	国内	大学	長崎県立大学、長崎外国語大学、立命館アジア太平洋大学 九州国際大学、立教大学 他
		高校	東明館高校（佐賀県）、羅臼高校（北海道） 西伊豆高校（静岡県）
	国外	大学	釜慶大学校（韓国・釜山）、釜山外国語大学校
		高校	釜山情報観光高校
壱岐 高校	国内	大学	長崎県立大学、奈良大学、別府大学
		専門 機関	長崎県埋蔵文化財センター、壱岐市立一支国博物館 大浦天主堂キリシタン博物館
	国外	大学	上海外国語大学
		高校	光明中学校

②効果測定について

(1)	学習への 内発的動機付け		○生徒アンケート ○教師アンケート ○学習活動の変容（活動実績）
(2)	語学力	対馬 高校	○韓国語(TOPIK)検定合格率（2級以上）目標 (H30) 60.0% (H31) 62.5% (H32) 65.0%
		壱岐 高校	○中国語検定合格率（4級以上）目標 (H30) 50.0% (H31) 52.5% (H32) 55.0%
(3)	課題研究の内容		○論文の作成数 【壱岐高校のみ】 ○各種コンテストへの入賞数
(4)	グローバル人材 の育成		○海外研修への参加者数の推移 ○中国・韓国の語学・ 文化・歴史を学び進路選択の幅を広げること
(5)	学校満足度		○生徒アンケート ○志願者数の推移

(7) 事業概要図 (ポンチ絵)

「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」
 テーマ：遠隔教育システムを用いた国内外の大学等との連携による教育効果について

長崎県教育委員会

※遠隔教育システムとは…テレビ電話等、インターネット回線を用いて相互交流を図るもの。

【研究目的】

本県は、日本列島の西端に位置するとともに、多くの国境難島地域を有する。そのため古くからアジア諸国との交易があり、様々な文化がもたらされた歴史を持つ。この度、研究指定を行う難島の2校は、地理的・歴史的背景を踏まえた特色あるコースを設置している。これら2校において、韓国や中国の大学をはじめ、国内の大学・高校や専門機関等と遠隔教育システムで結ぶことで、①コースに関連する専門性の高い教育内容を生徒に提供する、②生徒の語学の運用能力やコミュニケーション力等を高める、など教育内容の充実を図ることで、生徒の資質能力の向上と学校の活性化を目指す。

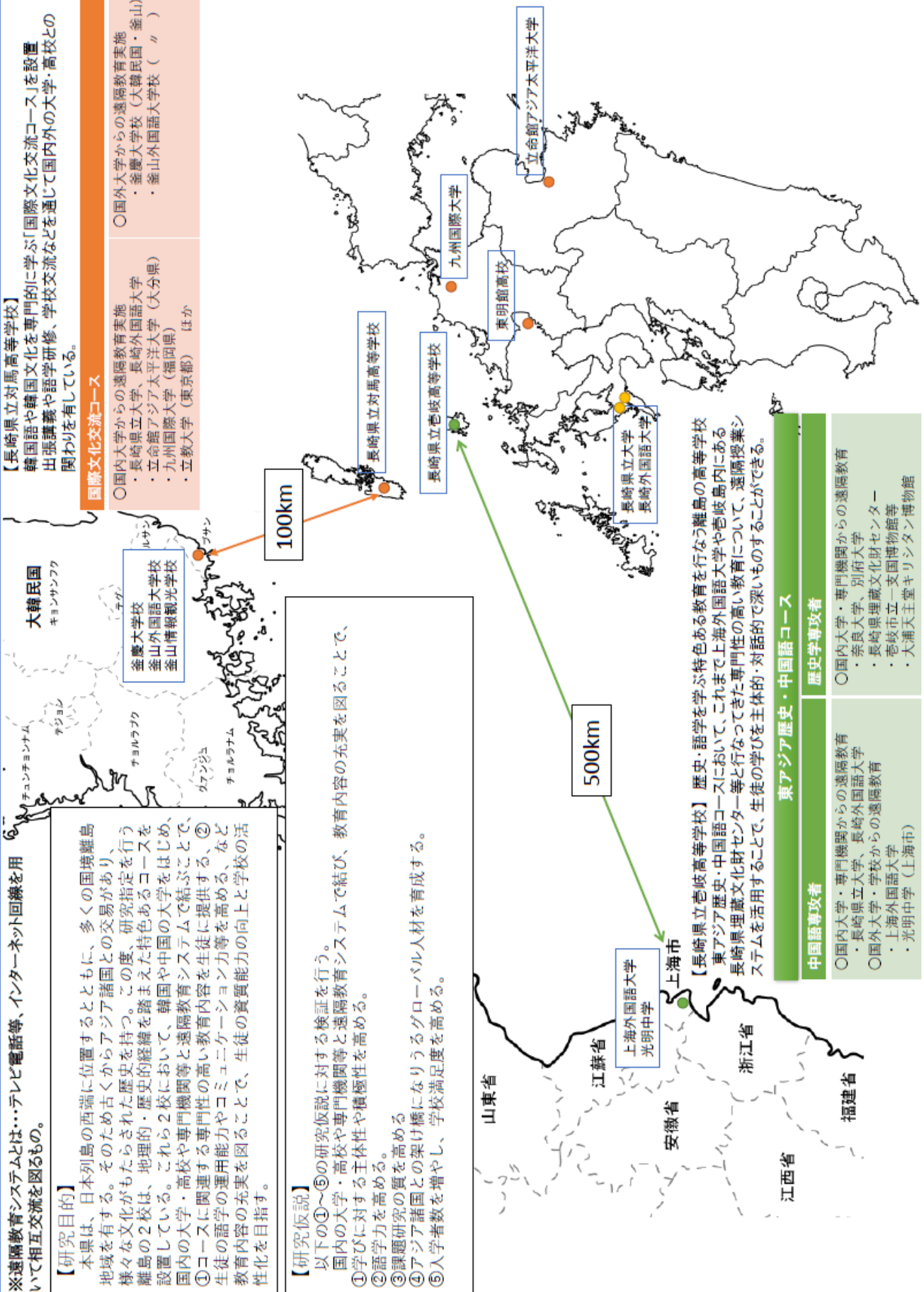
【研究仮説】

以下の①～⑤の研究仮説に対する検証を行う。
 国内の大学・高校や専門機関等と遠隔教育システムで結び、教育内容の充実を図ることで、
 ①学びに対する主体性や積極性を高める。
 ②語学力を高める。
 ③課題研究の質を高める。
 ④アジア諸国との架け橋になりうるグローバル人材を育成する。
 ⑤入学者数を増やし、学校満足度を高める。

【長崎県立対馬高等学校】
 韓国語や韓国文化を専門的に学ぶ「国際文化交流コース」を設置
 出張講義や語学研修、学校交流などを通じて国内外の大学・高校との
 関わりを有している。

国際文化交流コース

- 国内大学からの遠隔教育実施
 - ・長崎県立大学、長崎外国語大学
 - ・立命館アジア太平洋大学（大分県）
 - ・九州国際大学（福岡県）
 - ・立教大学（東京都） ほか
- 国外大学からの遠隔教育実施
 - ・金慶大学校（大韓民国・釜山）
 - ・釜山外国語大学校（ 〃 ）



【長崎県立杵岐高等学校】 歴史・語学を学ぶ特色ある教育を行なう難島の高等学校
 東アジア歴史・中国語コースにおいて、これまで上海外国語大学や杵岐島内にある
 長崎県理蔵文化財センター等と行なってきた専門性の高い教育について、遠隔授業シ
 ステムを活用することで、生徒の学びを主体的・対話的で深いものすることができる。

東アジア歴史・中国語コース	
中国語専攻者	歴史学専攻者
<ul style="list-style-type: none"> ○国内大学・専門機関からの遠隔教育 <ul style="list-style-type: none"> ・長崎県立大学、長崎外国語大学 ○国外大学・学校からの遠隔教育 <ul style="list-style-type: none"> ・上海外国語大学 ・光明中学（上海市） 	<ul style="list-style-type: none"> ○国内大学・専門機関からの遠隔教育 <ul style="list-style-type: none"> ・奈良大学、別府大学 ・長崎県理蔵文化財センター ・杵岐市立一支国博物館等 ・大浦天主堂キリシタン博物館

第2章 平成30年度（2018年度）の取組

1 事業管理機関

(1) 委託契約まで

月	内 容
3 月	2日 公募開始 ⁽⁶⁾ 27日 企画提案書の提出
4 月	16日 文部科学省より内定通知 20日 事業計画書（仮）の提出
5 月	8日 釜慶大学校、釜山外国語大学校訪問（～10日） ⁽⁷⁾ 16日 上海市教委等訪問（～18日） ⁽⁸⁾ 25日 事業計画書（正）の提出 30日 文部科学省と委託契約締結

(2) 外部検討会議委員の委嘱について

月	内 容
5 月	29日 梅嶋真樹 特任准教授（慶應義塾大学）へ委嘱依頼 （長崎県庁にて、田川参事、重村係長、岩國指導主事）
6 月	25日 周 国強 准教授（長崎県立大学）へ委嘱依頼 （長崎県立大学にて、田川参事、重村係長、岩國指導主事）
7 月	2日 山田良介 准教授（九州国際大学）へ委嘱依頼 （九州国際大学にて、田川参事、重村係長） 5日 検討会議委員委嘱状の発出

⁽⁶⁾ 高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業（遠隔教育の質の確保・向上に向けた実証研究）「委託要項」及び「公募要領」が平成30年3月2日付けで発出された。

⁽⁷⁾ 高校教育課の事業である釜山語学研修の事前訪問。この訪問にあわせて、本事業への協力を依頼した。

⁽⁸⁾ 高校教育課の事業である上海語学研修の事前訪問。この訪問にあわせて、本事業への協力を依頼した。

(3) キック・オフ・ミーティング

平成30年7月9日実施

①目的

第1回検討会議及び3ヵ年の見通しを踏まえた本年度の実施計画（案）を、調査研究校が具体的に策定できるようにするための情報交換等を行うことを目的とする。

②研究主題

遠隔教育システムを用いた国内外の大学等との連携による教育効果について

③日時

平成30年7月9日（月）13:00～15:00

④場所

長崎県庁行政棟3階 319会議室（長崎市尾上町3番1号）

⑤参加者

役割	所属	役職等	役割	備考
調査研究校	対馬高校	校長 教諭	立木 貴文 上村 洸貴	校長 校内推進員
	壱岐高校	校長 教諭	平山 啓一 濱栗 啓吾	校長 校内推進員
事業管理機関	高校教育課	参事	初村 一郎	企画・立案
		参事	田川耕太郎	企画・立案
		係長	重村 恭彦	研究支援担当
		指導主事	岩國 峰明	技術支援担当
		係長	吉田 拓弘	会計事務担当

⑥内容

- (1) 本事業の目的について
- (2) 調査研究校の実施計画について（対馬高校、壱岐高校）
- (3) 関係行事等の日程について
 - ①第1回検討会議
 - ②第1回遠隔教育サミット
 - ③第2回検討会議
 - ④事業報告書、会計報告書の文科省提出
 - ⑤その他
- (4) 会計事務について
- (5) その他

(4) 第1回検討会議

平成30年8月8日実施

①目的

調査研究校における遠隔教育の普及、推進に関する取組について共通理解を図り、実践研究の在り方等について協議を行う。

②研究主題

遠隔教育システムを用いた国内外の大学等との連携による教育効果について

③日時

平成30年8月8日(水) 10:30~12:00

④場所

長崎県庁行政棟3階 319会議室(長崎市尾上町3番1号)

⑤参加者

所 属		役職等	氏 名	
検 討 会 議 委 員	長崎県教育庁	政 策 監	島村 秀世	
		高 校 教 育 課	課 長 林田 和喜	
	長崎県教育センター	副 所 長	西田 哲也	
	慶應義塾大学大学院	政策・メディア研究科	特任准教授	梅嶋 真樹
	長崎県立大学	国際社会学部	准 教 授	周 国強
	九州国際大学	現代ビジネス学部	准 教 授	山田 良介
	長崎県立対馬高等学校		校 長	立木 貴文
長崎県立壱岐高等学校		校 長	平山 啓一	
事 業 管 理 機 関	長崎県教育庁	高 校 教 育 課	参 事	初村 一郎
			参 事	田川耕太郎
			係 長	重村 恭彦
			指 導 主 事	岩國 峰明

⑥会次第

(1) 開会

①長崎県教育委員会あいさつ

②出席者紹介

③本日の日程確認

(2) 事業の目的、計画の概要等について

①事業管理機関(長崎県教育庁高校教育課)

②調査研究校(長崎県立対馬高等学校、長崎県立壱岐高等学校)

(3) 第1回遠隔教育サミットについて関係行事等の日程について

(4) 閉会

(5) 第1回遠隔教育サミット in 長崎

平成30年11月20日実施

①目的 文部科学省からの受託事業⁽⁹⁾である「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」における遠隔教育に係る調査研究上の成果や課題等について共有を図ることにより、今後の高等学校教育における遠隔教育の取組の推進に資することを目的とする。

②主催 長崎県教育委員会

③日時 平成30年11月20日(火) 11:00～16:30

④会場 長崎県庁行政棟1階 大会議室A (〒850-8570 長崎県長崎市尾上町3-1)

⑤参加者 参加を希望する都道府県・政令指定都市教育委員会及び学校関係者等

⑥日程 10:30 11:00 10 30 40 50 12:40 13:40 14:40 15:00 20 15:50 16:20 16:30

受付	開会	長崎県による説明	事前説明	遠隔授業参観	休憩	調査研究校による発表 (質疑応答、指導助言含む)	情報交換		総括	文部科学省による行政説明	閉会
----	----	----------	------	--------	----	-----------------------------	------	--	----	--------------	----

⑦内容

10:30～11:00	受付
11:00～11:10	開会
11:10～11:30	長崎県による説明
11:40～11:50	(遠隔授業参観に係る) 事前説明
11:50～12:40	遠隔授業参観 長崎県立対馬高等学校と釜山外国語大学校との遠隔授業の様子を遠隔システムにて接続して参観
12:40～13:40	[休憩]
13:40～14:40	調査研究校による発表(質疑応答、指導助言を含む) ①長崎県立対馬高等学校による発表 ②質疑応答 ③長崎県の本事業検討委員による指導助言
14:40～15:00	情報交換(各県の取組等について)
15:00～15:20	[休憩]
15:20～15:50	総括 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 特任准教授 慶應義塾大学グローバル・リサーチ・インスティテュート 所員 マレーシア工科大学 客員教授 梅嶋真樹氏
15:50～16:20	文部科学省による行政説明 慶應義塾大学と遠隔システムにて接続して視聴
16:20～16:30	閉会
18:00～20:00	情報交換会

⁽⁹⁾ 受託団体は、北海道、静岡県、徳島県、高知県、長崎県、大分県の6道県である。

⑧参加者アンケート（集約）

A 長崎県による説明

■ 1 「分かりやすかった！」「理解が深まった！」「参考になった！」

- よく整理されていて、分かりやすかったです。
- 遠隔授業の可能性、有効性、課題が良く分かりました。
- よく分かりました。
- これまでの過程がよく分かりました。
- 長崎県での地理的環境、遠隔システムの利用方法について理解が深まりました。
- 短い時間で遠隔教育の長所、短所をまとめてくださりとても参考になりました。
- 長崎県の取組の趣旨や概要について学ぶことができました。
- 遠隔教育についての考え方がよく分かった。現場の教員が行う授業の60%か70%のパフォーマンスであることを踏まえることが大切だと感じた。

■ 2 「上手くいかなかったこと、課題を教えてくれたことが参考になった！」

- プラス面ばかりの強調だけでなく、上手くいかなかったことなどを正直に説明いただきありがたかった。
- 遠隔授業に関する長崎県としての取組がよく分かりました。ニーズがあって始まったこと、実際に行ってみて良かった点だけでなく、上手くいかなかった事例も教えて下さり、参考になりました。
- 離島における教育環境の整備、向上の手段の一つとして遠隔教育を実施しているところに心をひかれました。成果や課題がとても分かりやすかったです。
- 取組過程や目的が簡潔に理解できましたし、課題について詳らかに紹介ただけで参考になりました。
- これまでの取組状況と成果、反省もまじえた説明であり、遠隔教育の可能性、問題点をつかむことのできる内容だった。

■ 3 「前向きな気持ちにさせてもらった！」

- 各高校における取組内容や通信環境の状況等、細かい部分まで分かりやすくお話いただき、是非本県でも本腰を入れて動けるよう、力を尽くしたいと強く思いました。
- 遠隔教育の展開は、県の理念、リーダーシップが必要であると強く感じました。今後も是非学ばせていただきたいと思います。

■ 4 「もう少し詳しく説明が聞きたかった…」

- ×説明の中で「小規模校の教育水準維持の手段として遠隔教育は不十分な手段である」と結論付けがなされていたが、その判断理由について、もう少し具体的な説明が聞きたかった。

B 遠隔授業参観

■ 1 「生き生きとした生徒の姿に感動！」

- 生徒たちが生き生きとしていた。
- 事前の説明が分かりやすかったです。生徒たちが生き生きとしていました。
- 生徒の集中している姿が印象的。
- 語学にとっても効果的であることと、生徒の生き生きとした様子が参考になった。
- 生徒が目的意識をしっかりと持って取り組んでいる様子が印象的でした。
- 生徒たちの一生懸命に活動する姿が素晴らしい。
- 事前のしっかりとした準備もあってか、生徒の表情も明るく良かったと思います。

■ 2 「生徒の語学力に驚いた！」「遠隔授業が生徒の語学力アップにつながっている！」

- （遠隔授業が）学習意欲を高めていることを実感した。また、生徒の語学力の高さに感心した。
- ここまで韓国語が話せるようになるとは…、驚いた。
- 生徒さんの語学力に驚きました。遠隔教育の効果だと実感しました。
- まず生徒の韓国語会話力の高さに驚いた。モチベーションの高さからなのか、学校の指導力も高いからだろうが、遠隔授業も明らかに補完的役割を果たしているのだろうと感じた。
- 外国語教育では、ネイティブスピーカーとのやり取りが大切になり、遠隔教育でそれを可能にしている、生徒も刺激的だと思います。
- 対馬高校における韓国語授業の成果を感じることができました。
- グローバル人材が対馬に普通にいて、とっても面白く見させてもらいました。

■ 3 「指導面での配慮、ノウハウが生かされている！」

- 技術、システム面のみならず、指導面での配慮の程がよく見てとれました。
- 生徒さんの学習に対する熱意と、遠隔を感じさせない韓国の先生方の熱心な御指導、間を取り持つ金先生の生徒さんへの愛情、すべてが伝わる 50 分でした。素晴らしいです。

■ 4 運営面について

- 遠隔教育を遠隔で参観できるという方法がとても良かったです。
- 実際に研究授業を見ているかのように、面白かったです。授業後に生徒に質問する時間が設けられていた点も、生の声を聞くことができ良かったです。
- 生徒の生のコメントがあったのが良かったです。
- システムがよく機能していたと思う。
- ×音声がとぶのが気になりました。
- ×教室の後方からみた、教室全体の様子など教室の全体像が見たかったです。

■ 5 参加者の今後の取組に向けた新たな気づき等

- 私自身がテーマとしたい機器についても触れていただき参考になりました。
- 海外の学校との連携を本校でもやりたいと思いました。
- ×（遠隔で授業を行う場合、授業者が）生徒全体を見渡すとなると、ズームアップ機能等が必要ではないかと思った。

C 調査研究校による発表

■ 1 「分かりやすかった！」「参考になった！」

- まとめが分かりやすかった。
- 実施内容、課題等、よく分かりました。
- よくまとめられており、参考になりました。
- スライドが分かりやすかったです。
- 極めて明確で分かりやすく、遠隔教育の方向性、メリット・デメリットを理解することができました。大分県の参考にさせていただきたいと思います。
- 成果と課題がとても分かりやすい説明で、ありがとうございました。
- 対馬高校の取組について、よく分かりました。
- 課題についてのあぶり出しが正直にされていて、参考になりました。



■ 2 「学習内容、学習効果を考えた取組であった！」

- 取組の成果がわかる実践発表でした。教育内容に重点が置かれ、汎用性のあるものでしたので、参考にさせていただこうと思いました。
- 学習効果をよく考えていた。今後の取組の深化に期待したい。
- 対面（授業）と遠隔（授業）を上手く組み合わせていることが良く分かりました。
- 具体的な状況を知ることができ、効果的な活用方法について考えることができた。

■ 3 「頑張っている対馬高校の先生方への共感！」

- 現場の先生方が一丸となって取り組まれている様子、それを束ねる校長先生の力量、どれも頭が下がる思いでいっぱいです。ありがとうございました。
- 様々な課題を解決しながら、頑張られている様子が伝わって参りました。
- 専門的知識、技術を持たない先生方でも対応可能と聞いて勇気付けられました。

■ 4 運営面について

- 組織づくりがとても大切だと感じた。
- 現在の取組についてしっかりと現状を把握されており、集中して聴くことができました。

■ 5 システム面について

- 教育ネットではなく、外部回線を利用する可能性について知ることができ、大きな収穫でした。
- ×通信状況の安定する対策をしていただければ、学校の取組も更に優れたものになると思いました。

D 情報交換

■ 1 「各県の取組が分かった！」「各県の取組の違いが分かった！」

- 各県の状況がよく分かりました。
- 各県の状況が分かりました。
- 各県の様子を知ることができて良かった。
- 各県の現在の取組状況が聞けて有意義であった。
- 九州各県の状況がよく分かり参考になった。
- なかなか知る機会のない他県の取組を知ることができて、大変勉強になりました。
- 各県で実施形態も様々ですが、それぞれ興味深いものでした。
- 各県の取組がよく分かりました。各県の状況に応じた WEB 会議の利用方法があるということが分かりました。
- 機器の課題以外での授業に焦点化した取組について、共通のビジョンを各県とも持っていらっしゃることが分かりました。

■ 2 今後も情報交換の機会を得る必要を感じる声も…。

- 各県とも、これからの重要課題として取り組むことになり、このような情報交換の場が継続してあれば良いのですが…。
- 今後も情報交換の必要性を感じた。
- 各県の取組で現実的な課題と、その解決へのヒントを得ることができました。県それぞれがこのような機会にアイデアを持ち寄るのは有益だと思います。

■ 3 大分県の取組への関心は高い

- なかなか広域的に実現していないことを知った。大分県の高校各校に1校の海外交流校という取組は面白い。
- 大分の発表を通して、遠隔教育のこれからの可能性を知ることができました。

■ 4 新たな視点など他県からの新たな気づき等

- 他県に比べてエンジンのかかり方の弱さを痛感しています。多くの示唆を与えてくださり、ありがとうございました。
- 遠隔授業の目的や形態などについて、基本的なことから学ぶことができました。

E 総括

■ 1 梅嶋真樹特任准教授の総括、仁藤先生の感想に対する共感、絶賛の声

- 梅嶋先生の話は、大いに参考になりました。指導側の意識すべき4つの内容は役立つものだと思います。
- 総括が良かった。大変勉強になりました。
- 総括は大変参考になりました。
- 遠隔授業の目的、在り方、これからの方向性等、大変よく分かりました。また仁藤先生の具体的な意見も、とても参考になりました。
- 梅嶋特任准教授の話で、頭の中がとても整理される部分が多く、非常に参考になりました。

○本校では 20 数年前に NTT の協力で、佐賀商業高校と太良高校を結んで「情報処理 (Excel)」と「中国語」を行った経験があります。2 年間実施しましたが、当時は 1 時間 1 万円のコストがかかりました。また、教育センターで平成 14 年にテレビ会議システムを使って、特支の生徒に授業を行う研究を行ったことがあります。私は教師のスキルを広く、多くの生徒に提供できる環境整備として遠隔授業に期待しています。以前より、教材のスタンダード化と併せて取り組んできたところですので、梅嶋先生の総括は共感しました。また、仁藤先生のお話は大いに参考になりました。ありがとうございました。

■ 2 論理コミュニケーションについて

○慶応大学の「論理コミュニケーション」に関する事例紹介は、大変参考になりました。
×長崎県の遠隔授業の代表例として、「論理コミュニケーション」について総括の中で詳しく説明がありましたが、実際にどのような授業であるのか、見てみたかったです。

F 行政説明

■ 1 「これからの教育における遠隔教育の位置づけに対する理解が深まった！」

- 最新情報を提供下さり、ありがとうございました。力強い後押しをいただいたことに感謝します。
- 遠隔教育の実状と方向性を知ることができました。
- 世の中の変化に遅れないように、中央からの情報には常に意識を向けたいと思います。
- 有益な情報を得ることができました。
- これからどんどん進んでいくことが分かりました。
- 文科省からの説明で、最新の流れがよく分かりました。
- 「システム→体験型→学習型」への移行という発想の転換は大変印象に残りました。また、それが国の施策ともリンクしていることを理解することができました。
- 近年の遠隔教育について知ることができて良かったです。
- 教育の新しい可能性としての遠隔教育の在り方など、今までよく分かっていなかったことがクリアになりました。



■ 2 「大きな枠組みからの話も聞きたかった！」

× (遠隔システムを利用したにも関わらず) ひとつひとつスライドを説明されていたのが印象的でした。もう少し大枠について、まずはざっくりと教えていただくと、より理解ができたと思います。

G その他

■ 1 「新たな視点、取組に出会えて良かった!」「勉強になった!」

- 本日代理参加ではありましたが、やりたいことにたくさん出会いました。
- これまで抱いていた遠隔授業のイメージを大きく変えることができた、とても貴重な機会となりました。遠隔授業の可能性を知ることができました。
- 大変勉強になりました。ありがとうございました。
- 今日はありがとうございました。大変参考になりました。
- さまざまな情報が紹介され、大変有意義でありました。
- 様々な立場の方の考えや様々な都道府県の取組について知ることができて、長崎県の現状やその中の本校の取組を相対的に知ることができました。

■ 2 参加者の次につながる前向きな御意見

- もっと交流に積極的に巻き込まれたいと思います。
- 大変参考になるサミットでした。次回開催があれば、是非参加したいと思います。
- ビジネスクラス、エコノミークラス、いずれが本県にとって良いか考えていきたい。大いに参考になりました。

■ 3 長崎県の取組に対する期待の声

- もっと簡単に、もっとお求めやすく、もっとつながりやすく、大いに期待しています。
- 長崎県の進化を感じました。

※参考 地元民放で同日 18 時のニュースで紹介されました。

下記はネットに掲載されている同局の記事です。

インターネットで海を越えた授業

 NCC長崎文化放送

2018年11月20日



九州各県の教育関係者らがインターネットを使った遠隔教育について意見を交わしました。文部科学省の担当者や九州各県の教育関係者らが出席した「遠隔教育サミット」。インターネットを使った遠隔教育の現状や課題について話し合いました。県内の公立高校では、2011年から遠隔教育を実施していて、57校全てにシステムを導入しています。会場では、対馬高校が実施している韓国の釜山外国語大学校との韓国語の授業が紹介されました。生徒が披露する韓国語の寸劇に韓国の大学生が発音をアドバイスします。文科省は、高校と大学などとの連携を通じて、多様な学習指導の充実を目指していて、対馬高校と壱岐高校は県立大のほか、釜山や上海の大学の遠隔授業を受けています。

(6) 第2回検討会議

平成31年1月15日実施

①目的

事業初年度の取組を振り返り、本年度の成果と課題を整理し、次年度以降における実践研究の在り方等について協議を行う。

②研究主題

遠隔教育システムを用いた国内外の大学等との連携による教育効果について

③日時

平成31年1月15日(火) 10:30~12:00

④場所

長崎県庁行政棟3階 303会議室(長崎市尾上町3番1号)

⑤参加者

所 属		役職等	氏 名	
検 討 会 議 委 員	長崎県教育庁	政 策 監	島村 秀世	
		高 校 教 育 課	課 長 林田 和喜	
	長崎県教育センター	副 所 長	西田 哲也	
	慶應義塾大学大学院	政策・メディア研究科	特任准教授	梅嶋 真樹
	長崎県立大学	国際社会学部	准 教 授	周 国強
	九州国際大学	現代ビジネス学部	准 教 授	山田 良介
	長崎県立対馬高等学校		校 長	立木 貴文
長崎県立壱岐高等学校		校 長	平山 啓一	
事 業 管 理 機 関	長崎県教育庁	高 校 教 育 課	参 事	初村 一郎
			参 事	田川耕太郎
			係 長	重村 恭彦
			指 導 主 事	岩國 峰明

⑥会次第

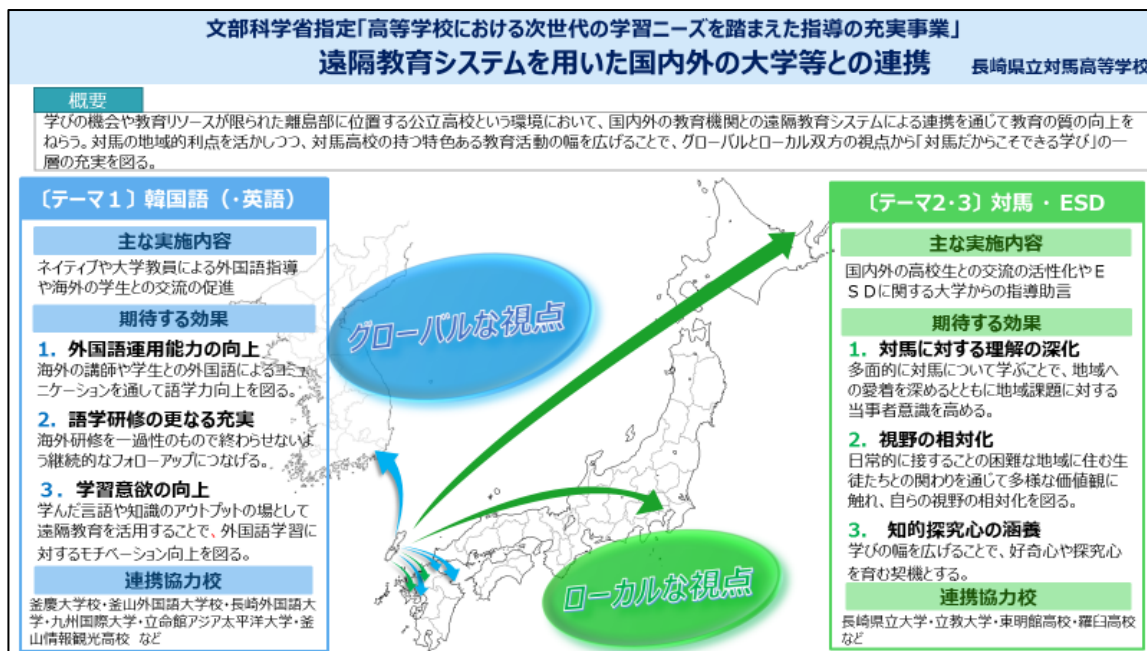
- (1) 開会
- (2) 第1回遠隔教育サミットについて(長崎県教育庁高校教育課)
- (3) 調査研究校による報告(長崎県立対馬高等学校、長崎県立壱岐高等学校)
 - ①本年度の成果と課題について
 - ②次年度以降の取組について
- (4) 外部検討会議委員による指導、助言
- (5) 次年度の日程調整等
- (6) 閉会

2 調査研究校

(1) 対馬高等学校

①全体概要

ア 取組の概要



対馬高等学校は、古来より大陸・朝鮮半島との交流の窓口となった対馬に所在する全校生徒476名（平成31年2月1日現在）の普通科・商業科併設の全日制課程の高校である。創立は1905年と古く、今年度で創立113年を迎える伝統校で地域の信頼も厚く、また支援も得やすい環境にある。他方、平成15年度に全国の公立高校で唯一韓国語及び韓国の文化を本格的に学ぶことのできる「国際文化交流コース」を設置したり、平成26年度には長崎県内で初めてユネスコスクールに加盟したりするなど、新しい取組に挑戦する進取の気風を有する学校でもある。

こうした対馬の地理的・歴史的特性と、伝統と進取の気風に富んだ学校の特色を踏まえて、本校における本事業の取組を企画していった。

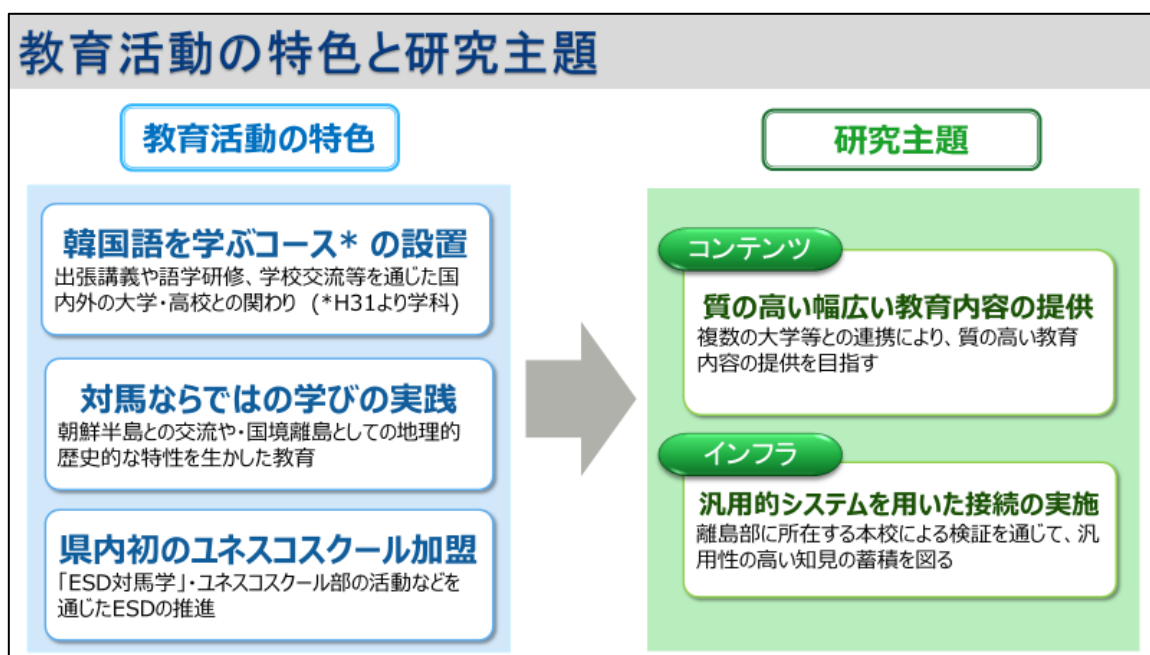
はじめに、本校における本事業の位置づけとねらいについて示す。本校は九州本土から大きく離れた離島部に位置する公立高校であり、生徒の学びの機会や教育リソースに限られた環境にある。その一方で既述の通り他にはない地域・学校の特色から多くの国内外の大学等が本校の教育に関心を寄せており、そうした大学等の協力を得ながら遠隔教育システムを活用して、提供できる教育の幅を広げると同時に教育の質を高めることができるのではないかと考え研究を進めている。

そのための視点をグローバルとローカルの双方に据え、その2つの視点から取組を進めることにより学びを深めていきたいと考えている。具体的には、前者の視点から大学教員による外国語指導や海外の学生との交流の促進を通じた外国語

運用能力や学習意欲の向上を、後者の視点から国内外の高校生との交流の活性化やE S Dに関する大学教員からの指導助言を通じて、地元対馬に対する理解を深め、生徒の地域や社会をとらえながら視野の相対化や知的探求心の涵養を図ることを目指している。

前ページの図は、本校の取組の概要を全体イメージとして示したものである。

イ 教育活動の特色と研究主題



ここでは、本校の教育活動の特色と本研究における研究主題がどのように関連しているかを示す。

本校の教育活動の特色は大きく3つに分けて示すことができる。1つは韓国語及び韓国の文化を本格的に学ぶ「国際文化交流コース」を有しており、国内・韓国の大学からの出張講義や約2週間の釜山外国語大学校での語学研修、姉妹校である釜山情報観光高校との学校交流など、国内外の大学等と多くの関わりを持っている。次に、本校の所在する対馬が朝鮮半島との交流や国境離島としての地理的・歴史的な特性を有することから、地元自治体等の協力も得ながらそれらを生かした「対馬ならではの学び」の提供に取り組んでいる。そして、3点目としてユネスコスクールの理念を具現化するための1、2年生の総合的な学習の時間を活用した「E S D対馬学」や絶滅危惧種の蝶の保全活動に取り組むユネスコスクール部の活動などを通してE S Dの推進に努めている。これらの教育活動を基盤に置きながら、さらに教育効果を高めるために遠隔教育システムを活用していきたいと考えた。

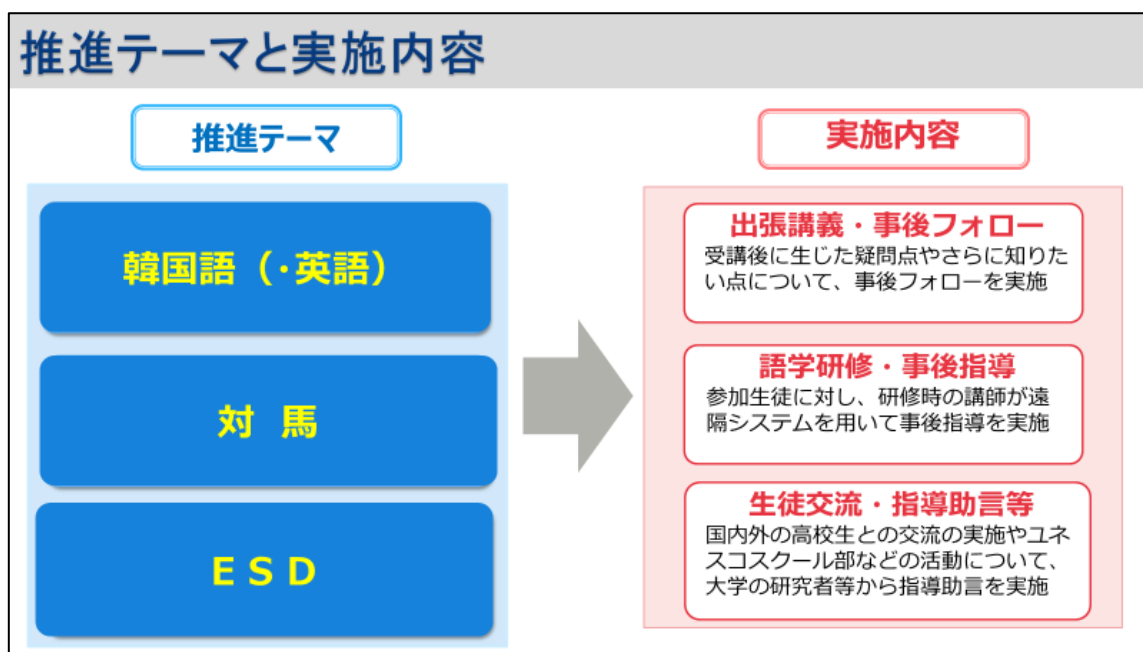
なお、遠隔教育の研究を進める上で本校ではコンテンツとインフラという2つの側面から研究主題を設定している。コンテンツ面に関しては、複数の大学等との連携により教育内容の質の向上を図ることを、インフラ面に関しては都市部と比べて通信環境が十分とは言えない離島に位置する本校による汎用性の高い

Skype 等のシステムを用いた検証を進めることで、中山間地域を含めた多くの地域において活用の可能となる汎用性の高い知見の蓄積を図るというものである。

ウ 推進テーマと実施内容

前項で述べた本校の教育活動の特色に基づき、「韓国語（・英語）」、「対馬」、「ESD」という3つの推進テーマを設定し、検証を進めることとした。

それぞれのテーマのもとで、遠隔教育システムを活用した実施内容を「出張講義・事後フォロー」「語学研修・事後指導」「生徒交流・指導助言等」の3つに大きく整理し、それぞれの大学等との実践を進めていった。



まず、これまでの出張講義が大学等から来校して行っていただく講義の聴講にとどまるなど一過性のもので終わる面が強かったことを踏まえ、出張講義後に遠隔教育システムを活用して、講義内容を事後フォローする機会を設け、学びの質を深化させることを行うこととした。

同様の理由から語学研修についても、研修終了後、一定期間を経たのちに研修時の講師から事後指導を行ってもらうことで研修中に学んだことや帰国後の学びを一層充実させるようにした。

さらに地理的なハンディキャップから自由な往来が困難であることを埋める一助として、遠隔教育システムを活用して国内外の高校生との交流やユネスコスクール部の活動にESDを推進する大学の研究者や学生から指導助言をもらうといった取組を進めている。

エ 連携協力校

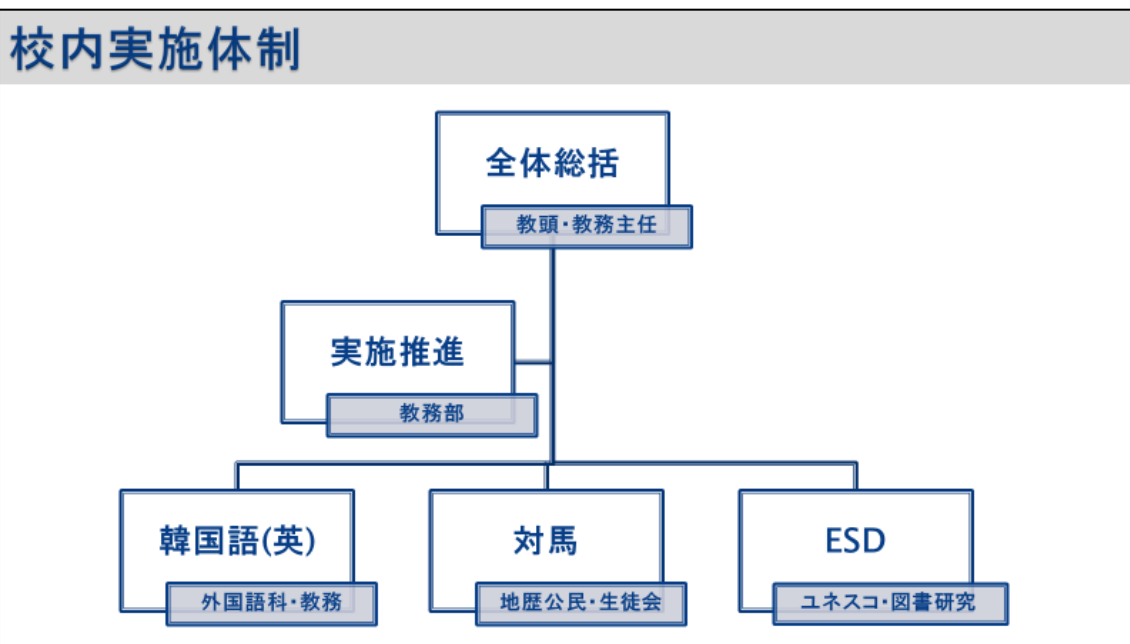
縦軸に推進テーマ、横軸に実施内容を取り、本研究に協力いただける大学等をそれに照応するようにマトリクスで示したものが次ページの表である。

連携協力校

	出張講義・事後フォロー	語学研修・事後指導	生徒交流・指導助言等
韓国語 (・英語)	長崎外国語大学 九州国際大学 (英語) 立命館アジア太平洋大学	《韓国》 釜慶大学校 釜山外国語大学校	《韓国》 釜山情報観光高校
対馬	長崎県立大学		東明館高等学校 (佐賀県)
ESD			立教大学 (羅臼高等学校など)

先に示した本校の教育内容等に関心を有する大学等に本事業の趣旨等を説明し協力を依頼したところ上記の大学等が賛意を示し、今年度はこのうち国内の5大学1高校、韓国の1大学と研究を進めた。

オ 校内実施体制



本校における遠隔教育の実施体制は上記のとおりである。教頭および教務主任が全体を統括し、教務部内に実施推進の主担当を配置した。そのもとにテーマ別に「韓国語（英語）」については外国語科及び教務部、「対馬」には地歴公民科及び生徒会指導部、「ESD」についてはユネスコスクール部及び図書研究部を担当として割り当てている。

このような実施体制をとった意図は2点ある。1つには様々な分掌や教科、部

活動で取り組むことにより多くの教員が関わって本研究を推進することで学校全体としての知見を蓄積できることと、もう1つには本研究を通して得た知見を多くの教員が自身の教科指導等の教育活動に活用することで、今後求められるであろう学校外の教育資源を活用した指導力を有する教員を育成できることである。

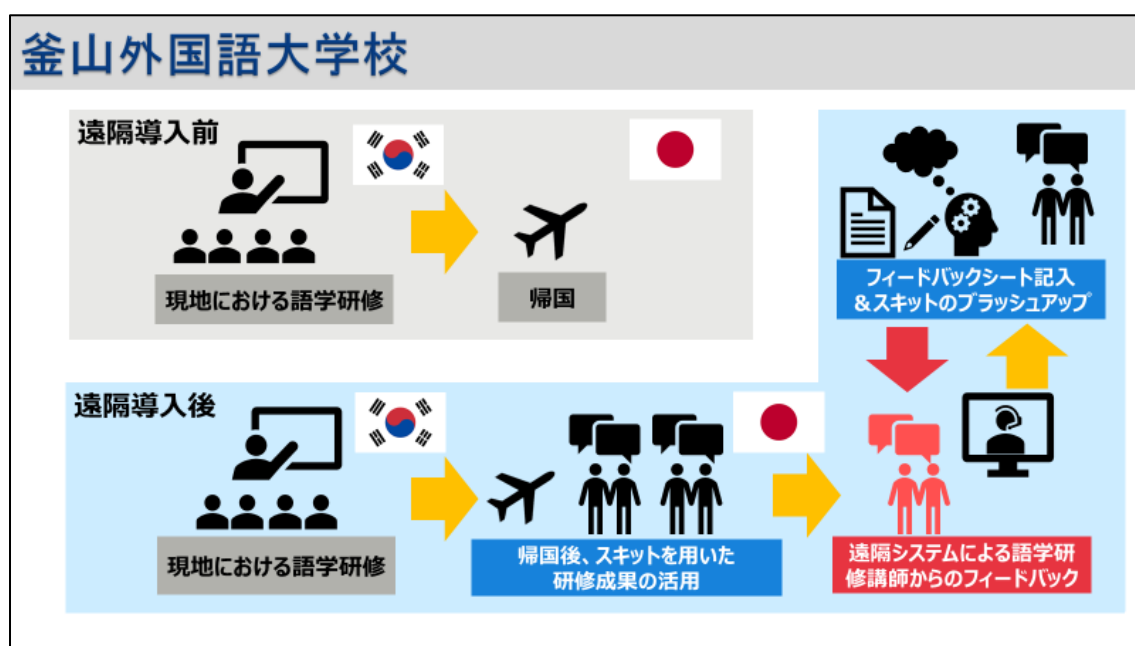
遠隔教育に限らず新しい取組はややもすると特定の教科や職員のみが関わるのみにとどまり、広く職員間で共有したり生徒に還元したりすることが困難となりがちである。本研究に先立って昨年度までの3年間、文部科学省の研究指定を受けて進めた「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」における本校の遠隔教育の実践ではそうした傾向から脱却できなかつた。本事業では多くの教員が関わることで、その改善を意図している。

②実践内容

次の表は、今年度の各大学等との取組状況を一覧にまとめたものである。

	学 校 名	教科等	出張講義等	遠隔講義	生徒学年等	人数
1	釜山外国語大学校	韓国語	8月(語学研修)	10・11月	1年	15名
2	九州国際大学		10月	10月		
3	長崎外国語大学		1月	1月	2年	19名
4	立命館アジア太平洋大学	英 語	12月	2月	1年	60名
5	長崎県立大学	日本史	12月	1月	2年	39名
6	東明館高校	生徒会交流	8月	11月	生徒会	10名
7	立教大学	E S D		1月	ユネスコスクール部	3名
8	釜慶大学校	生徒交流		3月(予定)	1～3年	10名程度

ア 釜山外国語大学校との実践



例年韓国語及び韓国の文化を学ぶ国際文化交流コースに所属する1年生は夏季休業期間を利用した約2週間の釜山外国語大学校（釜山市・私立大学）での語学研修に参加している。研修への参加は語学に対するモチベーションや韓国語活用能力の向上という点で一定の成果を残していたものの、2週間という限られた期間の学びであり一過性のイベントにとどまる傾向にあった。そこで遠隔教育システムを用いて研修後のフォローアップを充実させることで、中長期的に生徒の学ぶ意欲を高めるとともに学びの質を高めることができるのではないかと考え、以下の取組を行った。

具体的には、現地での研修中の学びを活かし、帰国後に生徒はスキット形式での発表を行うために授業中にスキットの台本作りや2人1組のペアでの練習をすすめた。ある程度習熟したところで遠隔教育システムを用いて釜山外国語大学校と本校をつないでスキットを演じ、遠隔教育システムを通して演じたスキットに対する助言や指導を受ける機会を2回設けた。



語学研修中に指導を受けた講師がフィードバックを行うということで、この実践は生徒にとって研修以来の講師との「再会」でもあり、和やかな雰囲気の中で行われた。

なお、11月に行った2回目の実践は別の遠隔システムを介して長崎市内で開催された「遠隔教育サミット in 長崎」の会場にも配信され、参観した出席者からも高い評価を得たところである。

イ 九州国際大学との実践



昨年度まで本校で行ってきた出張講義は大学の先生を招いての講義を行い、その受講後に感想文を書いて終了という形をとることが多かった。そのため、生徒にとって講義そのものには大いに刺激を受けながらも一過性のものになりがちであり、イベント性の強いものとなっていた。遠隔教育システムを活用することでそうした状況を改善し、生徒の学びを深めることができないかと考え、以下のような取組を行った。



まず出張講義実施後に生徒に記入させるフォローアップシートを作成した。シートでは講義の学びや疑問点、さらに知りたいと思ったことなどを項目別に整理させることで、生徒自身が講義から何を学び、何を疑問ととらえたのかについて論理的に整理し、自ら気付くことができるように工夫した。生徒が記入したシートは講師に送付し、その内容を踏まえて講師が遠隔教育システムを介して講義を行うこととした。

対面での出張講義と遠隔での講義の間にこのプロセスを組み込むことで、生徒が出張講義で受講した内容を整理できるだけでなく、講師も生徒の理解度がどの程度なのか、興味・関心がどこにあるのかを把握したうえで遠隔での講義を実施できる。そのため、遠隔での講義が単なる対面での講義の「続き」ではなく、より生徒のニーズに即したものとなることで教育の質の向上が図れるようになったと考えている。

平成30年度九州国際大学出張講義及び大学説明会	
フォローアップシート	
1. 今日の講義を聞いて分かったこと	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> > > > </div>
2. 今日の講義を聞いて疑問に思ったこと	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> > > </div>
3. 今日の講義を聞いてさらに知りたいと思ったこと	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> > > </div>
4. 感想	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <hr/><hr/><hr/><hr/><hr/><hr/><hr/><hr/> </div>

ウ 長崎外国語大学との実践



同大とは昨年8月に高大連携協定を提携しており、その一環として出張講義及び遠隔講義を行う運びとなった。なお、今年度を実施した国際文化交流コースの1年生を対象とした3つの遠隔講義のうち、前述の釜山外国語大学校との試みは韓国語によるコミュニケーション、九州国際大学は韓国と日本(対馬)の歴史および文化に主眼を置いたものとするれば、同大とは韓国語の語彙をメインテーマとした取組となる。

まず出張講義において日本人講師1名に来校してもらい、日本語と韓国語の相違点について単語の発音や表記を比較しながら語彙に対する理解を深めた。その後、生徒は事後課題として身の回りの韓国語の成り立ちについての調べ学習を行い、その内容をもとに遠隔講義を実施した。遠隔講義では「語彙をふやそう」というタイトルのもと生徒が3～4人1組となり、クイズも交えながら、ハンゲルに当てはまる漢字をみて日本語の意味を考えるといった授業が進められ、生徒が韓国語に対して一層理解を深める一助となった。

また、インフラ面で特筆すべき点として、本講義は13:25～14:15という通信トラフィックに比較的負荷がかかる時間帯に行ったため、映像や音声途切れることが懸念されたが、実際にはそのようなことはなく、円滑に進めることができた。同大が充実した設備を備えていること(前掲右の写真参照)も加味すると、遠隔先のインフラ環境も通信の良し悪しを左右する一因ではないかということが想定される。

エ 立命館アジア太平洋大学 (APU) との実践



同大とは英語の歴史や多言語との比較をメインテーマとして英語に関する出張講義を実施し、この講義を受けて2月下旬にシンガポール、タイ、ベトナム、インドネシア出身の留学生らと遠隔交流を行った。

まずコンテンツ面に関して、事前準備として、対馬高校側は6人1グループとなりグループ別に地元対馬に関するトピック(自然・経済・歴史・観光・特産品等)からテーマを一つ選びプレゼンテーションを準備し、APUの留学生には母国に関するプレゼンテーションを用意してもらった。その上で当日は自己紹介を交えながら互いに事前に準備したプレゼンテーションを行う中で交流を深めた。

インフラ面に関しては、次ページのイメージの通り同時並行でグループワークを行えるよう、5台の情報端末とルーターを用意した。当初はルーター1台に5台の情報端末を接続する予定だったが、検証段階でそれだとネットワークに高負荷がかかり映像がほとんど送受信できないことが分かった。そこで1端末に1台ルーターを用意することでネットワークの負荷を軽減し、遠隔交流を行ったとこ

ろ、2時間にわたり映像・音声ともに途切れることなく円滑に交流を進めることができた。



詳細は後述するが、本校では遠隔教育を推進する上でいかに授業への参加が消極的になる生徒(=「外野」)を作らない授業形態をつくるかが一つの課題であるにとらえている。その点において1対多の講義形式ではなく、本実践のように1対少人数で同時並行的にグループワークを進めることは一定の効果があつたように思う。また、とりわけ外国人と接する機会の少ない離島の生徒にとっては、実際に英語を使って外国人とコミュニケーションを図ることそのものが新鮮だったようで、生徒の感想にも英語学習に対するモチベーションが高まり、日本や対馬への理解を深める必要性を感じたという声や、人と人がコミュニケーションを図る上で大切なことが何なのか気づかされたといった意見が多数みられた。

オ 長崎県立大学との実践



同大との試みは地理歴史科の授業において、平成29年度にユネスコ世界記憶遺産に認定された「朝鮮通信使」を素材として実施した。

まず、出張講義で同大の教員1名と学生3名に来校してもらい、朝鮮通信使に関する講義と関係する本校近隣の史跡(国分寺・金石城跡・西山寺)を巡るフィールドワークを実施した。遠隔講義では、他の実践同様に出張講義後に生徒が提出したフォローアップシートをもとに、フィールドワークに対する補足説明および質疑応答を行ったが、生徒は古地図を活用しながら現在との相違点を確認する活動から歴史と地理の多面的な理解を深めていった。

またインフラ面において、受講人数が多くなるほど画面からの距離が遠い生徒の授業参加意識が薄くなる傾向がこれまでの実践も見られることへの対応として、画面を複数配置し、生徒と画面を介した講師の距離が近づく工夫を試みた。単純な対応ではあつたが、講師の提示する古地図の細かな部分を全生徒がしっかりと確認できるなど、遠隔教育システムを用いた多人数の講義における一定の有効性を確認することができた。

カ 東明館高等学校との実践



本校では、今年度から対馬と歴史的なゆかりの深い佐賀県基山町に所在する私立高校の東明館高校と学校交流をすすめている。具体的には、東明館高校の生徒が夏休みに本校に来校して対面での交流を行い、生徒会活動全般や文化祭のオープニング案などについてディスカッションを実施した。その時の意見交換を踏まえて、後日遠隔教育システムを介して対馬高校は実際に行った文化祭の報告を、東明館高校は次年度開催する文化祭の企画を相互に発表し、活発な意見交換を行うことができた。

キ 立教大学との実践

対馬市の協力のもとで絶滅危惧種の対馬固有の蝶であるツシマウラボシシジミの保護活動に取り組んでいる本校のユネスコスクール部は、ESDを積極的に推進する立教大学の学生と8月にツシマウラボシシジミの保護区で協働するなどの交流を行った。同大学の学生はツシマウラボシシジミの保護活動に必要な資金確保のためにクラウドファンディングを企画しており、その出資者に提供するピンバッジのデザイン等について本校生徒と協力したい旨の申し出が同大からあった。そこで遠隔教育システムを活用し、その準備についての協議やバッジのデザインについての意見交換を進めている。



ク 釜慶大学校との実践（予定）

韓国語及び韓国の文化を本格的に学ぶ本校の国際文化交流コース（次年度から学科）からは韓国の大学に直接進学する生徒が毎年数名おり、その数は今春卒業予定の生徒を含め14年間で53名を数える。これまでは韓国の大学に進学した卒業生を年1回程度招いて講話を行うことができるのみであったが、今後は遠隔教育システムを活用して実施時期や頻度の制約が少なくなると考えている。

特に本校に韓国語講師を招へいしている釜慶大学校（釜山市・国立大学）とは本事業に関する取組を次年度から実施する予定としており、その試行を兼ねて今年度末から次年度初めにかけての時期に、同大在学の本校卒業生との遠隔交流を予定している。

③本年度の成果と課題まとめ

ア 各種効果測定結果

①アンケート結果

(1)環境について

■生徒アンケート

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
① (スライドを使用した場合) 教材のスライドの画面はよく見えた。	23	30	7	3
② (送信元の)先生の画面はよく見えた。	43	15	4	1
③ (送信元の)先生の声はよく聞こえた。	49	6	8	0

■教師アンケート

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
① (スライドを使用した場合) 教材のスライドの画面はよく見えた。	1	6	0	0
② (送信元の)先生の画面はよく見えた。	5	2	0	0
③ (送信元の)先生の声はよく聞こえた。	4	2	1	0

スライドや音声に関するアンケート結果である上記①～③は、生徒、教師ともに同様の回答傾向を示している。対馬の通信環境は決して恵まれたものではなく不安定なことも多いが、校内の教育ネットワークと切り離して通信キャリアのルーターを用いた接続を行っていることもあり、使用に耐えうる最低限の条件をクリアしているのではないかと考えている。回答にややばらつきがみられたのは本遠隔に関わった生徒、教師のうち、鮮明で安定した画面・音声を期待した者による評価がやや厳しかったためではないかと考える。

(2)授業について

■生徒アンケート

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
④私は、授業の内容が理解できたと思う。	13	44	6	0
⑤私は、(送信元の)先生の指示が理解 できたと思う。	27	33	3	0

■教師アンケート

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
④生徒は、授業の内容を理解したと思う。	5	2	0	0
⑤生徒は、(送信元の)先生の指示を理解 したと思う。	6	0	1	0

教師の母数が少ないので確たることは不明だが、前ページ④⑤の項目は生徒・教師で回答に開きの大きい項目である。「遠隔で伝えることのできる教育内容の質や量は対面の6～7割程度」と言われるが、生徒は対面での同じ大学教員の授業と比較して、遠隔での講義を不十分と判断したのではないだろうか。

(3) その他

■生徒アンケート

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑥私は、遠隔システムによる専門性の高い授業を受けて、学習意欲が高まったと思う。	2 3	2 4	1 6	0
⑦私は、遠隔システムによる専門性の高い授業が行われている学校は、行われていない学校よりも魅力的だと思う。	5 1	1 0	2	0
⑧遠隔システムによる授業は、それが無い場合と比較すると自分にとってプラスだと思う。	5 2	1 1	0	0

■教師アンケート

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑥生徒は遠隔システムによる専門性の高い授業を受けて、学習意欲を高めたと思う。	1	6	0	0
⑦私は、遠隔システムによる専門性の高い授業が行われている学校は、行われていない学校よりも魅力的だと思う。	3	4	0	0
⑧遠隔システムによる授業は、それが無い場合と比較すると生徒にとってプラスだと思う。	6	1	0	0

上記「(3)その他」に関する質問項目では、⑧の項目は生徒、教師の回答傾向が一致しているのに対して、⑦の質問項目の回答に相違のあることが興味深い。

本校では「足し算の遠隔教育」をうたい、**対面で従前から行っている教育活動に遠隔教育を加味することで教育の質の向上を図る**ことを意図している。⑧の項目の回答は生徒、教師ともに高い評価を与えているが、このことは今回の実践の意図がストレートに反映されたものと考えられる。

他方、⑦については教師よりも生徒のほうがこの遠隔教育の持つ魅力と可能性を敏感に感じ取っているのではないかと考える。アンケートに回答した教師もそれぞれの対面での講義や遠隔講義に積極的に関わってはいるが、受講の主体は生徒自身であり教師はその「伴走者」ととどまらざるを得ない。画面を介してとはいえ対面授業やフィールドワークなどで関わった大学等の講師による再びの授業提供が、生徒にとって大きなインパクトであることをこの項目⑦の結果から感じ取ることができる。

次年度の実施についても一層の改善を試みながら、遠隔教育の推進を図っていかねばならないと考えさせられる結果である。

②語学力

TOPIK（韓国語能力試験）2級以上の合格率は55.6%であった（20名／36名中）。なお、TOPIK2級とハングル検定4級が相当であると判断されているケースもあり、そのことを踏まえてハングル検定4級以上の合格者も加味した場合、合格率は68.6%となる（35名／51名中）。

③各種コンテストへの入賞数

大会名	主催	結果
A 第46回 韓国語弁論大会	韓国 大阪青年会議所	〈ビギナー部門〉 ・優秀賞1名 ・奨励賞1名
B 韓日交流 作文コンテスト2018	駐日韓国文化院	〈韓国語エッセイ中高生部門〉 ・最優秀賞1名 ・佳作1名 ・入選1名 〈韓国語 韓国旅行記部門〉 ・入選1名
C 第1回長崎県 韓国語スピーチ大会	在日韓国民団 長崎県支部	〈暗誦部門〉 ・奨励賞1名 〈スピーチ部門〉 ・特別賞1名
D 第7回KIU ハングル・スピーチ コンテスト	九州国際大学	〈課題朗読の部〉 ・最優秀賞1名 〈自由発表の部〉 ・優秀賞1名
E 第12回 クムホ・アジアナ杯 話してみよう韓国語 福岡大会	駐日韓国文化院 クムホ・アジアナ 文化財団	〈韓国語スキット部門〉 ・最優秀賞1組 ・奨励賞1組

上記のすべてが本事業開始後のものではなく、また遠隔講義を受講した生徒と完全に一致するわけではないが、特にEで示す大会は、先に述べた釜山外国語大学校との遠隔教育システムを活用した取組と関連して出場した大会であり、本校としては3年ぶりに最優秀賞を受賞し全国大会出場権を獲得するなど、一定の成果を示すものと言える。

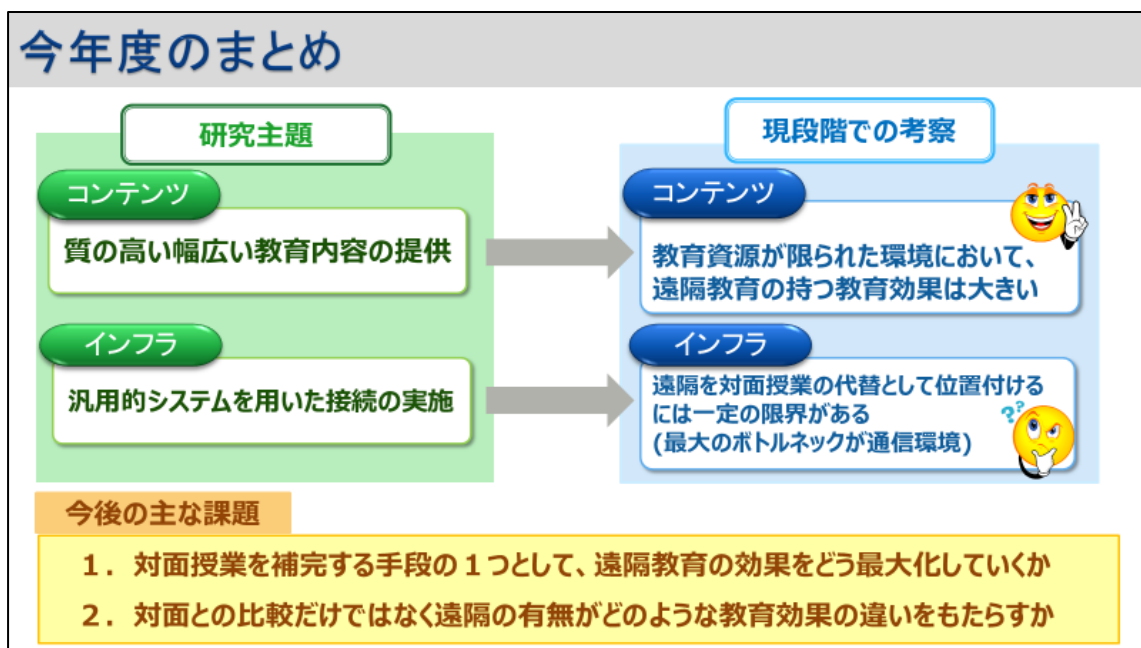
④海外研修の参加者数推移

国際文化交流コースを対象とした長崎県教育委員会主催の「高校生の釜山韓国語研修」（8月実施、約2週間）への参加者数が20名（1年生16名、2年生4名）、対馬市主催の「第1回日韓交流海ごみワークショップ in 釜山」（1月実施、2泊3日）への参加者数が29名（1年生）、「平成30年度日韓高校生交流（派遣）事業」に2年生1名が参加している。

⑤志願者数の推移

平成31年度入学者選抜における志願者数は前年比24名増の42名であり、コースが設置されて以来、最も多かった。

イ 成果と課題



本校では、これまでの本校での実践等から遠隔教育には、a) これまで対面で行っていた教育を遠隔教育に置き換えて負担軽減や業務の合理化を図ることを目的とする「引き算の遠隔教育」と、b) 従来の対面型授業に遠隔教育システムを活用して何らかの要素を加え教育の質を高めることを目的とする「足し算の遠隔教育」の2つがあると考えている。

今回の研究指定で本校では、b) に示した「足し算の遠隔教育」の視点から遠隔教育をとらえ、様々な実践を行ってきた。釜山外国語大学校と連携して行った複数のネイティブによる韓国語スキットへの指導助言、長崎県立大学と連携したフィールドワーク後のフォローアップ、また佐賀県の東明館高校と連携した生徒交流など、いずれも遠隔教育システムの活用なしには実現できなかった。こうした幅広い教育活動の展開が可能になるという意味で、本校のような教育資源が限られた環境において遠隔教育が果たす役割は非常に大きいと考える。それは先述のアンケート結果の中で「⑧遠隔システムによる授業は、それが無い場合と比較すると自分にとってプラスだと思う」に対して生徒・教師とも8割以上が「そう思う」と回答していることから窺える。今後も遠隔教育システムを活用してどのように対面授業の教育の質を向上させるかというコンテンツ（教育内容）の観点から、様々な実践を充実させる必要があると考える。

一方でインフラ面に関しては、大きく2つの課題が浮き彫りになったのではないかと考える。1つは通信環境に関する問題である。特に正午前後の時間帯に遠隔教育を行った場合、通信環境が芳しくなく映像や音声途切れる、PowerPointのデータを画面共有しようとした際に遅延が大きいなど、授業の進行に支障をきたす局面があった。これについては時間帯の工夫や容量の大きいデータは事前にやり取りをしておくなどして回避する必要がある。もう1つはいかに「外野」を作らない授業形態をつくっていくかである。画面越しで講師対生徒が1対nとな

った場合、n の数が増えるほど、また画面からの物理的な距離が離れるほど、生徒が授業に対して消極的になる局面が散見された。そのためこれまでの実践報告の中で述べてきたように、複数の端末を同時に接続することでいかに n の数を減らすか、また複数画面を用意することで単なる画面視聴的な授業参加ではなくどれだけ生徒が授業に集中できる環境を構築するかといった工夫を行っていくことが、それぞれの実践における生徒の学びを深めていくように思う。

④今後の取組

来年度に向けて

今年度実施分のブラッシュアップ

- 出張講義とその後の遠隔講義の内容の関係性の円滑化
- 外野を作らない参加形態の模索

追加の取組み

- 北海道・羅臼高校とのユネスコスクール交流
- 釜慶大との韓国語学習プログラム開発
- 釜山情報観光高校との姉妹校交流
- 一過的なもので終わらせない継続性を持たせた取組の推進

次年度以降を見据えた今後に向けた取組として、まずは前項で触れた課題を踏まえ、今年度実践を行った各大学等の協力を得ながら遠隔教育の中身のブラッシュアップを図りたいと考えている。具体的には、出張講義と遠隔講義の内容の関係性をどのようにして一層円滑化していくのか、野球の「外野」のように遠くから遠隔教育に参加するような生徒を作らない授業の在り方の工夫を引き続き進めていきたい。

また、韓国の大学との連携に関しては釜慶大学校との新たに実践を行っていく予定としている。釜山外国語大学校と行っている実践に同大学校とのプログラムを加えることで生徒の韓国語の学びの一層の充実を図っていきたい。さらに、ESDの推進に積極的に取り組む北海道の羅臼高校や10年以上の長きにわたって姉妹校交流を重ねる韓国の釜山情報観光高校などとの連携も新たに予定している。

引き続き遠隔教育の実施が受講する生徒の学びの質を高める効果を最大化できるように取組の工夫改善を進めていきたい。

(2) 吉崎高等学校

①本年度の取組

種別	期 日	曜日	内 容
[会]	5月21日	月	校内会議（事業概要と計画について協議）
[会]	6月26日	火	校内会議（実施計画について協議）
[会]	7月 4日	水	校内会議（実施計画の確定） → 県へ提出
[会]	9日	月	「キック・オフ・ミーティング」に校長・教務主任参加
[会]	19日	木	校内会議（今後の取組内容について協議）
[中]	31日	火	長崎県立大学を校長が訪問、遠隔事業を説明・協力依頼
[中]	8月 2日 ～3日	木 金	上海外国語大学を校長が訪問 上海光明中学を校長が訪問、本校と接続テストを実施
[中]	10月26日	金	長崎県立大学を校長が訪問、遠隔事業の詳細を協議
[歴]	11月 7日	水	奈良大学を校長が訪問、遠隔事業を説明・協力依頼
[中]	9日	金	長崎県立大学と本校担当者の接続テストを実施
[中]	13日	火	2年中国語授業で、長崎県立大学より遠隔指導を実施
[歴]	19日	月	別府大学を校長が訪問、遠隔事業を説明・協力依頼
[会]	20日	火	「遠隔教育サミット in 長崎」に校長参加
[会]	29日	木	校内会議（進捗状況と今後の取組について協議）
[歴]	29日	木	奈良大学と本校担当者の接続テストを実施
[歴]	12月 7日	金	別府大学と本校担当者の接続テストを実施
[歴]	10日 ～11日	月 火	1・3年歴史学専攻者が奈良大学の講義DVDを視聴し、質疑等を検討
[歴]	14日	金	奈良大学から1・3年歴史学専攻者に対して遠隔指導
[会]	1月15日	火	「第2回検討会議」に校長参加

※種別… [会] は会議、[歴] は歴史学専攻、[中] は中国語専攻

②本年度の成果と課題まとめ

ア	学習活動の変容 (活動実績)	○歴史学において、遠隔システムによる講義内容が文化財保護に関するものであり、本校で実施している考古学の授業内容と関連したものであったため、生徒にとって学校の学びとの関連性を強く意識することができた。 ○中国語において、遠隔システムを通して中国人准教授から発音を褒めてもらうことで、大きな自信となった。生徒にとって中国語の力を客観的に評価してもらう機会となり、前向きに取り組むことができた。
イ	中国語検定合格率（４級以上）	○在籍者数に対する４級以上取得者数の割合 ３６．４％（１２名／中国語専攻３３名） ※平成３０年度目標５０．０％
ウ	論文の作成数	○２本
エ	各種コンテストへの入賞数	○１本 第１２回全国高校生歴史フォーラム佳作（奈良大主催）
オ	海外研修への参加者数・参加率	○県教委主催 上海中国語研修 ２０名参加、６０．６％（２０名／３３名） ○上海市工商学校主催サマーキャンプ １名参加、３．０％（１名／３３名） ※中国語専攻３３名
カ	３年生におけるコースに関連する進学先を選択した生徒の数と率	○１０名、８３．３％（１０名／１２名） 長崎県立大国際社会学部（２名）、別府大文学部（１名） 奈良大文学部（１名）、関西大外国語学部（１名）、法政大文学部（１名）、立命館人文学部（１名） 上海外国語大（２名希望）、台湾の大学（１名希望）
キ	学校満足度に関する生徒アンケート結果	○遠隔システムによる学習意欲の高まりに関しては、全ての生徒が「そう思う」、「大体そう思う」と回答しており、満足度が高い。 ○遠隔システムで学ぶ内容が学校での学びに活かせるかに関しては、全ての生徒が「そう思う」、「大体そう思う」と回答しており、期待度が高い。 ※詳細は次ページ以降の資料を参照のこと
ク	志願者数 ⁽¹⁰⁾ の推移	○志願者数、志願倍率 H 3 0 ・志願者数２６名 ・志願倍率１．３倍 H 3 1 ・志願者数２０名 ・志願倍率１．０倍

⁽¹⁰⁾ 志願者数には、追加募集による志願者数を含む。

<アンケート集計結果・分析>

(1) アンケート対象者

受講生徒	14名	・歴史学専攻9名（3年：4名、1年：5名） ・中国語専攻5名（2年）
担当教諭	4名	・歴史学担当2名 ・中国語担当1名 ・通信機器担当1名

(2) 【共通・生徒】アンケート集計結果・分析

①環境について

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
①（スライドを使用した場合） 教材のスライドの画面はよく見えた。	10 (71%) 歴7中3	3 (21%) 歴1中2	1 (8%) 歴1中0	0 (0%) 歴0中0
②（送信元の）先生の画面はよく見えた。	8 (57%) 歴6中2	2 (14%) 歴2中0	4 (29%) 歴1中3	0 (0%) 歴0中0
③（送信元の）先生の声はよく聞こえた。	8 (57%) 歴6中2	5 (35%) 歴3中2	1 (8%) 歴0中1	0 (0%) 歴0中0

②授業について

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
④私は、授業の内容が理解できたと思う。	12 (86%) 歴9中3	2 (14%) 歴0中2	0 (0%) 歴0中0	0 (0%) 歴0中0
⑤私は、（送信元の）先生の指示が理解 できたと思う。	12 (86%) 歴9中3	2 (14%) 歴0中2	0 (0%) 歴0中0	0 (0%) 歴0中0

③その他

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑥私は、遠隔システムによる専門性の高い授業を受けて、学習意欲が高まったと思う。	13 (93%) 歴9中4	1 (7%) 歴0中1	0 (0%) 歴0中0	0 (0%) 歴0中0
⑦私は、遠隔システムによる専門性の高い授業が行われている学校は、行われていない学校よりも魅力的だと思う。	13 (93%) 歴9中4	1 (7%) 歴0中1	0 (0%) 歴0中0	0 (0%) 歴0中0

④自由記述欄

ア) 普段聞けない情報を得ることができてよかった。

イ) 大きなホールなどで行われる全体に向けた講演とは違い、自分の目の前で、講師の先生の近くで講義を聞いているように感じ、とても新鮮で頭に知識がずっと入ってきた。このような遠隔授業の機会は増やした方がよいと思う。

ウ) 遠隔授業を行うことで、さらに歴史の知識を深めることができるので、大学進学後のことを考えても、とても有益であると思います。

エ) 大学の先生の講義を受けることができ、知らなかったことを知ることができた。

(分析・所感)

通信時の画面の表示方法について、中国語の講義はスクリーンに投影、歴史学はパソコン上の画面で実施した。特に中国語の授業では、教室が明るすぎて画面が見えづらい状況があった。遮光カーテンを設置するなど、環境整備が必要である。

授業内容や先生の指示に対する理解度は高く、学習意欲の高まりを感じている生徒がほとんどである。生徒の感想からは、全体へ向けた講演ではなく対話的な形式で講義を受講できることや、大学で学ぶような内容を受講できることを魅力に感じていることがうかがえる。

(3) 【壱岐独自・生徒】アンケート集計結果・分析

①歴史学・考古学の学びについて（歴史学専攻9名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑧歴史学・考古学を学ぶ意欲が高まった。	9 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
⑨歴史学・考古学について、知識を深めることができた。	9 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
⑩授業で紹介された史料や展示物を、実際に史跡や博物館で、見てみたいと思う。	8 (89%)	1 (11%)	0 (0%)	0 (0%)

②学校の学びとの関連性について（歴史学専攻9名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑪遠隔システムで学ぶ内容が、現在学校で学んでいる歴史学・考古学の学びに活かせると思う。	9 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

③進路について（歴史学専攻9名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑫大学に進学し、歴史学・考古学についてさらに学びを深めたいという意欲が高まった。	6 (67%)	3 (33%)	0 (0%)	0 (0%)
⑬将来は歴史学・考古学に関する仕事で働いてみたい。(教員・研究員・学芸員など)	6 (67%)	3 (33%)	0 (0%)	0 (0%)

④中国語の学びについて（中国語専攻5名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑧中国語を学ぶ意欲が高まった。	4 (80%)	1 (20%)	0 (0%)	0 (0%)
⑨中国語によるコミュニケーション力が高まった。	3 (60%)	2 (40%)	0 (0%)	0 (0%)
⑩中国語を用いて、外国人とコミュニケーションを取りたいという意欲が高まった。	4 (80%)	1 (20%)	0 (0%)	0 (0%)

⑤学校の学びとの関連性について（中国語専攻 5名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑪遠隔システムで学ぶ内容が、現在学校で学んでいる中国語の学びに活かせると思う。	3 (60%)	2 (40%)	0 (0%)	0 (0%)

⑥進路について（中国語専攻 5名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑫大学に進学し、中国語についてさらに学びを深めたいという意欲が高まった。	3 (60%)	2 (40%)	0 (0%)	0 (0%)
⑬海外の大学に留学してみたいという意欲が高まった。	1 (20%)	3 (60%)	0 (0%)	1 (20%)
⑭将来は中国語を活用して働いてみたい。（通訳・国際機関・国際的な企業・中国語教師など）	3 (60%)	1 (20%)	1 (20%)	0 (0%)

(分析・所感)

歴史学・中国語ともに、専門分野を学ぶ意欲が高まっていることがうかがえる。特に歴史学においては、遠隔講義の内容が文化財保護に関するものであり、本校で実施している考古学の授業内容と関連したものであったため、学校の学びとの関連性を強く意識することができた。また中国語においては、講義後に「大学の先生に発音を褒めていただき、自信がついた」と感想を述べていた生徒もおり、自身の中国語の力を客観的に評価していただく貴重な機会となった。

進路意識の啓発についても概ね効果があったといえるが、より一層取組を行っていく必要がある。

(4) 【共通・教師】アンケート集計結果・分析

①環境について

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
①（スライドを使用した場合） 教材のスライドの画面はよく見えた。	1 (25%)	3 (75%)	0 (0%)	0 (0%)
②（送信元の）先生の画面はよく見えた。	1 (25%)	3 (75%)	0 (0%)	0 (0%)
③（送信元の）先生の声はよく聞こえた。	1 (25%)	2 (50%)	1 (25%)	0 (0%)

②授業について

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
④生徒は、授業の内容を理解したと思う。	0 (0%)	4 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
⑤生徒は、（送信元の）先生の指示を理解したと思う。	1 (25%)	3 (75%)	0 (0%)	0 (0%)

③その他

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑥生徒は遠隔システムによる専門性の高い授業を受けて、学習意欲が高めたと思う。	2 (50%)	2 (50%)	0 (0%)	0 (0%)
⑦遠隔システムによる専門性の高い授業が行われている学校は、行われていない学校よりも魅力的だと思う。	2 (50%)	2 (50%)	0 (0%)	0 (0%)

④自由記述欄

ア) 通信が途絶えた際の対応マニュアルの作成が必要。映像、また音声途絶えた場合実施できないため、通信環境の整備は必須である。
イ) 施行を重ねるごとにノウハウを蓄積して、よりよい授業ができるように工夫していきたい。
ウ) 大学の先生方と質疑応答を行うためには、生徒側にも相応のレディネスが必要。講義内容を理解するための基礎知識や、コミュニケーション力（対話力）も必要である。遠隔授業実施日を一つの目標とし、計画的に教育活動を行っていくことで、効果が出てくると感じた。

(5) 【老岐独自・教師】アンケート集計結果・分析

①歴史学・考古学の学びについて（歴史学担当2名、通信機器担当1名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑧生徒は、歴史学・考古学を学ぶ意欲が高まったと思う。	2 (67%)	1 (33%)	0 (0%)	0 (0%)
⑨生徒は、歴史学・考古学について、知識を深めることができたと思う。	2 (67%)	1 (33%)	0 (0%)	0 (0%)
⑩生徒は、授業で紹介された史料や展示物を見て、実際に史跡や博物館へ行きたいという意欲が湧いていると思う。	2 (67%)	1 (33%)	0 (0%)	0 (0%)

②学校の学びとの関連性について（歴史学担当2名、通信機器担当1名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑪遠隔システムで学ぶ内容が、現在学校で生徒が学んでいる歴史学・考古学の学びに活かせると思う。	2 (67%)	1 (33%)	0 (0%)	0 (0%)

③進路について（歴史学担当2名、通信機器担当1名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑫生徒は、大学に進学し、歴史学・考古学についてさらに学びを深めたいという意欲が高まったと思う。	2 (67%)	1 (33%)	0 (0%)	0 (0%)
⑬生徒は、将来、歴史学・考古学に関する仕事で働いてみたいという意欲が高まったと思う。（教員・研究員・学芸員など）	2 (67%)	1 (33%)	0 (0%)	0 (0%)

④中国語の学びについて（中国語担当1名、通信機器担当1名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑧生徒は、中国語を学ぶ意欲が高まったと思う。	1 (50%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)
⑨生徒は、中国語によるコミュニケーション力が高まったと思う。	1 (50%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)
⑩生徒は、中国語を用いて、外国人とコミュニケーションを取りたいという意欲が高まったと思う。	1 (50%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)

⑤学校の学びとの関連性について（中国語担当1名、通信機器担当1名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑪遠隔システムで学ぶ内容が、現在生徒が学校で学んでいる中国語の学びに活かせると思う。	1 (50%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)

⑥進路について（中国語担当1名、通信機器担当1名）

	そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑫生徒は、大学に進学し、中国語についてさらに学びを深めたいという意欲が高まったと思う。	1 (50%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)
⑬生徒は、海外の大学に留学してみたいという意欲が高まったと思う。	1 (50%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)
⑭生徒は、将来、中国語を活用して働いてみたいという意欲が高まったと思う。（通訳・国際機関・国際的な企業・中国語教師など）	1 (50%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)

③ 今後の取組

歴史学	○年間を通して系統立てた講義内容の検討と対象学年の選定を行う （カリキュラム内容と遠隔指導内容の整合性、遠隔指導の在り方等を含む） ○奈良大学と別府大学における指導内容の整理 ○日程の調整 など
中国語	○中国語の発音の指導を中心とした遠隔指導内容の検討 ○長崎県立大学と上海外国語大学における指導内容の整理 ○長崎県立大学生との遠隔を含めた交流の在り方 ○上海中国語研修を軸とした上海光明中学との交流内容 ○日程の調整 など
環境整備	○UQコミュニケーションズ社（LTE回線）との契約 ○使用教室の特定と機器・回線の設置 ○講師等への謝金 など

3 本年度の効果検証まとめ

(1) 学習への内発的動機付けについて

遠隔システムを活用して、専門性が高く、多様な学習内容を提供することが、学びに対する生徒の主体性や積極性を高める効果があることがアンケートの結果や教師の見取りから伺えた。

① 生徒アンケート

		そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑥私は、遠隔システムによる専門性の高い授業を受けて、学習意欲が高まったと思う。	対馬	23	24	16	0
	壱岐	13	1	0	0
	合計	36 (47%)	25 (32%)	16 (21%)	0 (0%)

② 教師アンケート

		そう思う	大体 そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
⑥生徒は、遠隔システムによる専門性の高い授業を受けて、学習意欲を高めたと思う。	対馬	1	6	0	0
	壱岐	2	2	0	0
	合計	3 (27%)	8 (73%)	0 (0%)	0 (0%)

③ 学習活動の変容、生徒コメント他

ア 授業内容や先生の指示に対する理解度は高く、学習意欲の高まりを感じている生徒がほとんどである（壱岐）。

イ 普段聞けない情報を得ることができてよかった（壱岐、生徒コメント）。

ウ 大きなホールなどで行われる全体に向けた講演とは違い、自分の目の前で、講師の先生の近くで講義を聞いているように感じ、とても新鮮で頭に知識がずっと入ってきた。このような遠隔授業の機会は増やした方がよいと思う（壱岐、生徒コメント）。

エ 遠隔授業を行うことで、さらに歴史の知識を深めることができるので、大学進学後のことを考えても、とても有益であると思います（壱岐、生徒コメント）。

オ 大学の先生の講義を受けることができ、知らなかったことを知ることができた（壱岐、生徒コメント）。

(2) 語学力について

遠隔教育サミットで紹介した国外大学との接続による韓国語スキットへの遠隔教育が、その後のコンテスト上位入賞の力となったことは、遠隔教育が語学力アップにつながる好例となった。

韓国語(TOPIK) 検定合格率 (2級以上) 【対馬高校のみ】	○55.6% (20名/36名中) ※平成30年度の目標 60.0% (参考) TOPIK 2級またはハングル検定4級以上 合格率68.6% (35名/51名中)
中国語検定合格率 (4級以上) 【壱岐高校のみ】	○36.4% (12名/33名中) ※平成30年度の目標 50.0%

(3) 課題研究について

壱岐高校の遠隔教育の本格的な実施が来年度からのため、歴史論文の作成本数及び論文の質の向上については、次年度の検証課題としたい。

①論文の作成数【壱岐高校のみ】

歴史学論文の作成数	○2本
-----------	-----

②各種コンテストへの入賞数

高校	大会名	主催	結果
対馬	A 第46回 韓国語弁論大会	韓国 大阪青年会議所	〈ビギナー部門〉 ・優秀賞1名 ・奨励賞1名
対馬	B 韓日交流 作文コンテスト2018	駐日韓国文化院	〈韓国語エッセイ中高生部門〉 ・最優秀賞1名 ・佳作1名 ・入選1名 〈韓国語 韓国旅行記部門〉 ・入選1名
対馬	C 第1回長崎県 韓国語スピーチ大会	在日韓国民団 長崎県支部	〈暗誦部門〉 ・奨励賞1名 〈スピーチ部門〉 ・特別賞1名
対馬	D 第7回KIU ハングル・スピーチ コンテスト	九州国際大学	〈課題朗読の部〉 ・最優秀賞1名 〈自由発表の部〉 ・優秀賞1名
対馬	E 第12回 クムホ・アジアナ杯 話してみよう韓国語 福岡大会	駐日韓国文化院 クムホ・アジアナ 文化財団	〈韓国語スキット部門〉 ・最優秀賞1組 ・奨励賞1組
壱岐	F 第12回 全国高校生 歴史フォーラム	奈良大学	・佳作1組

(4) グローバル人材の育成について

既に両校からは各コースの特徴を生かした進路を選択する生徒が多数いて、グローバル人材を輩出してきた実績がある。そこで次年度は、例年多数の生徒が参加している県教委主催の「釜山韓国語研修」「上海中国語研修」の教育効果をさらに高めるべく、両校ともに遠隔教育システムを活用し、コミュニケーション能力、異文化理解の精神等を身に付けさせ、特にアジア諸国との架け橋になりうるようなグローバル人材育成につなげたい。

①海外研修への参加者数

高校	研修名	主催	参加者数
対馬	A 高校生の 釜山韓国語研修 (7月～8月実施、約2週間)	長崎県教育委員会	20名 ・1年生16名 ・2年生 4名
対馬	B 第1回日韓交流 海ごみワークショップ in 釜山 (1月実施、2泊3日)	対馬市	29名 ・1年生29名
対馬	C 平成30年度 日韓高校生交流(派遣)事業	対馬市	1名 ・2年生 1名
壱岐	D 高校生の 上海中国語研修 (7月～8月実施、約2週間)	長崎県教育委員会	20名 (60.6%) ※33名中
壱岐	E 上海市工商学校主催 サマーキャンプ	上海市工商学校	1名 (3.0%) ※33名中

②中国・韓国の語学・文化・歴史を学び進路選択の幅を広げること

対馬	3年生におけるコース に関連する進学先を選 択した生徒の数と率	○12名、70.6% (12名/17名) ・釜山外国語大学校 1名 ・釜慶大学校 語学堂 2名 ・カトリック大学校(ソウル) 1名 ・永進専門大学(大邱) 2名 ・立命館大学(指定校) 1名 ・国士舘大学 1名 ・長崎短期大学 1名 ・韓国語を活用した就職 3名
----	---------------------------------------	---

壱岐	3年生におけるコースに関連する進学先を選択した生徒の数と率	○10名、83.3% (10名/12名)
		<ul style="list-style-type: none"> ・長崎県立大学国際社会学部 2名 ・別府大学文学部 1名 ・奈良大学文学部 1名 ・関西大学外国語学部 1名 ・法政大学文学部 1名 ・立命館大学人文学部 1名 ・上海外国語大学 2名希望 ・台湾の大学 1名希望

(5) 学校満足度の向上について

アンケート結果からは、遠隔教育システムを活用して様々な教育内容の充実を図ることが学校の魅力化につながると多数の生徒が考えており、この点を踏まえて実践、研究を進めていきたい。

① 生徒アンケート

		そう思う	大体そう思う	あまりそう思わない	そう思わない
⑦私は、遠隔システムによる専門性の高い授業が行われている学校は、行われていない学校よりも魅力的だと思う。	対馬	51	10	2	0
	壱岐	13	1	0	0
	合計	64 (83%)	11 (14%)	2 (3%)	0 (0%)

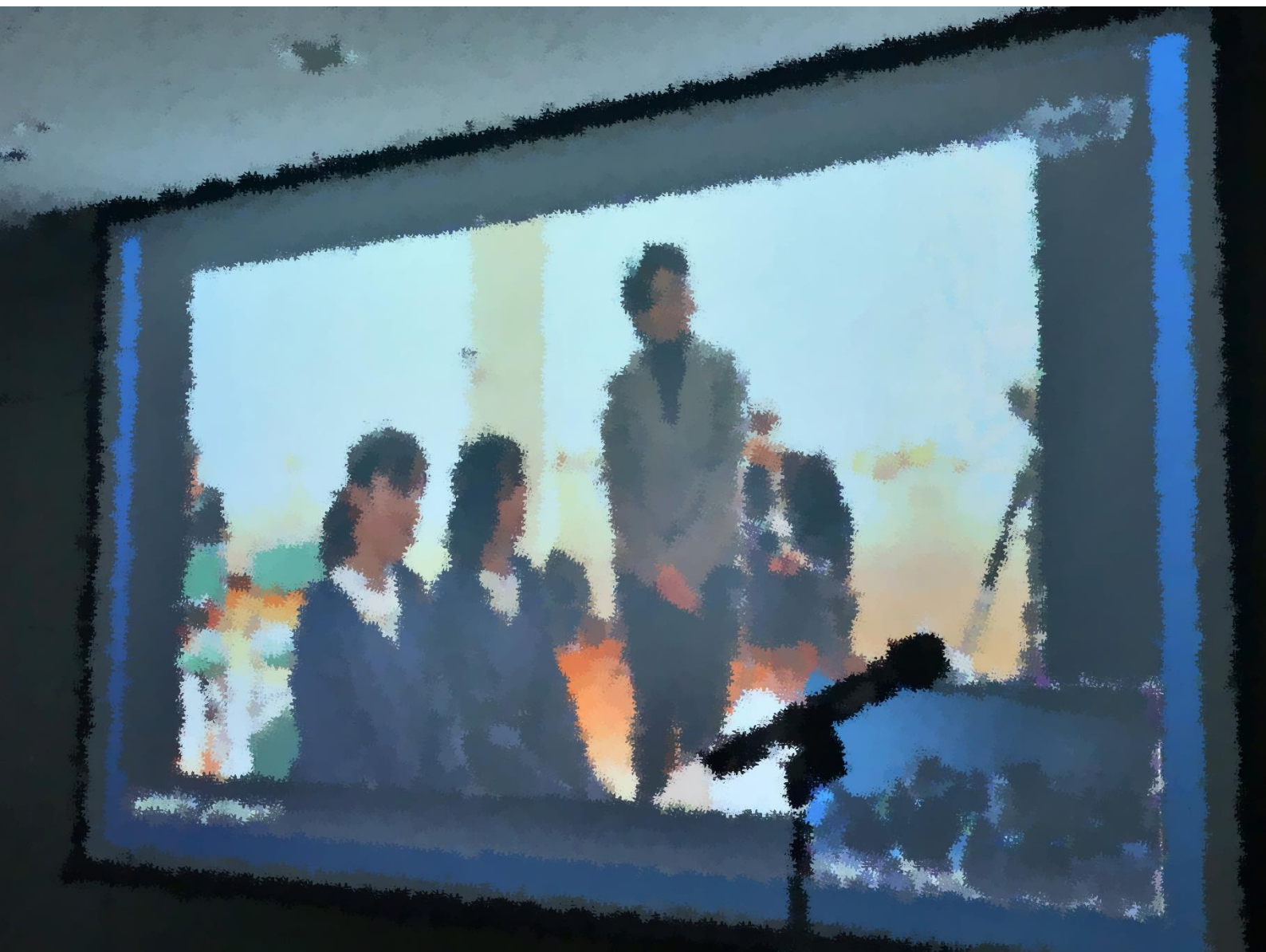
② 教師アンケート

		そう思う	大体そう思う	あまりそう思わない	そう思わない
⑦私は、遠隔システムによる専門性の高い授業が行われている学校は、行われていない学校よりも魅力的だと思う。	対馬	3	4	0	0
	壱岐	2	2	0	0
	合計	5 (45%)	6 (55%)	0 (0%)	0 (0%)

③ 志願者数⁽¹¹⁾の推移

	定員(名)	志願者数(名)		
		H29	H30	H31
対馬	(H29-H30) 20 (H31) 40	25	19	42
壱岐	20	12	26	20
計	(H29-H30) 40 (H31) 60	37	45	62

(11) 志願者数には、追加募集による志願者数を含む。



長崎県教育庁 高校教育課 高校教育班

住 所：長崎県長崎市尾上町 3-1

電話番号：095-894-3354（直）

メー ル：s40120@pref.nagasaki.lg.jp